
パンツァー・リート Panzer lied

ろっくまん提督

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンツァー・リート Panzer lied

【Nコード】

N3833W

【作者名】

ろつくまん提督

【あらすじ】

オンラインゲームにログインしたらゲームの世界に入っていた！
？ しかもゲームのキャラ（美少女）になってるなんて、それなんてお約束？ 剣と魔法と銃と陸戦兵器が闊歩する世界で主人公は何を求めるのか？ 陸戦兵器を愛する主人公は陸戦兵器より強かった！ *戦車や口ボなど、あまりファンタジーっぽくないメカファンタジー物です。さらに主人公最強の安心設計。努力型とシリアスがお好きな方は戻るボタンを押したほうがよろしいかと。

プロローグ（前書き）

初投稿です。駄文、稚拙な文章ですが、よろしくお願いします。

プロフィール

桐生徹（会社員 27歳 独身）は途方にくれていた。
荒野の真っ只中で。

桐生徹（会社員 27歳 独身）はオタクである。
ゲームにしろアニメにしろ、好きなジャンルはロボット物と魔法少女物。

近年人気が低下しているロボット物に未練を残しつつも魔法少女物にうつつを抜かし、ファンタジーなRPGにも手を出す。銃器やロボットへの愛執を捨てきれず、もやもやしていたときに出会ったのがMMORPG『パンツァー・リート』だった。

このゲーム、剣と魔法と銃と陸戦兵器（ロボットあり）というハチャメチャな世界観を持っていた。
銃を連射しつつ魔法を唱え、剣で切り結んで敵を倒すというトンでも世界だ。しかもロボット兵器、機甲騎兵で。

ハマった。

どっぷりとハマってしまった。

キャラはもちろん萌えるミニスカ少女。

キャラ身長より大きな白兵武器や銃を振り回し、範囲魔法で敵をなぎ払う。生身で立ち向かうには難しい相手も、戦車や機甲騎兵を持ち出せば十分に戦える。

狩りあり戦争あり。製造技能を駆使し、自分専用の機甲騎兵を設計製造までできた。

まさに徹の為にあるようなゲームだった。

どっぷりハマること5年。

レベルをカンストし、転生して再びカンストする。そしてさらに転生。

転生とレベルカンストを繰り返すことでさらに強くなる廃人仕様の『パンツァー・リート』。執念と執着を持って成長と転生を繰り返し、ドラゴンとでも生身でガチバトル可能となった徹はゲーム内でも有名人だ。

強くなりすぎたためパーティーを組めるプレイヤーは減ったが、レア素材ゲッターとしてギルド内でも重宝されていた。主にネタ装備な方向で。

所属ギルドには徹以外にも廃人は多数いたが、その実、ネタ装備系のほほんギルドな為、ギルド内関係は友好だ。

レベル上げに飽きがきたら、ギルメンとの無駄話や狩りに付き合ったり、レア装備、ネタ装備の品評会をしたりと充実した毎日を送っていた。

そんな折だ。

新フィールドと新装備の実装が発表されたのは。

発表はされたが、詳細はまったく公開されない謎の新フィールド。噂ではかなり異色なものらしい。

ネットの某巨大掲示板にはさまざまな推測と共に激論が繰り返されたが、現物が出るまでは幾ら論議してもまったくの無駄と言ったり前の結論に落ち着き、プレイヤー達は実装その日を待ちに待った。

新フィールド実装当日。

その日、徹は有給を取ってゲームが始まるのを心待ちにしていた。データは前日にダウンロード済み。ゲーム開始の正午までは、同じ

く休みを取ったギルメンとチャットなどで時間をつぶしていた。明日からの土日は休日。この週末は新フィールドを遊びつくすつもりだ。

そしていよいよ正午。

サーバーにアクセスし、ゲーム開始のエンターボタンを押したところで徹の意識は途切れた。

「……………あれ？」

意識を取り戻したとき、そこは一面の荒野だった。

ところどころ緑（たぶんサボテンと思われる）が見える以外は赤茶けた大地がどこまでも広がっている。

風が砂塵を巻き上げ空を赤く染めていた、と思ったら夕日だった。

「んなアホな」

先ほどまで、たしかに自分の部屋にいたはずだ。ゲーム開始は正午からだっただけから。

キーボードのエンターを押した所で気絶でもしたのだろうか？

そう言えば、最近身体の調子が良くなかったし。

「いやいや。まてまてまて。幾ら気絶してたからって、いきなり荒野のど真ん中にいるか？ あの家、アパートをいきなりリフォームしたのか？ どんな匠がリフォームしたらいきなり荒野になるんだ？ って、そりゃリフォームじゃなくて更地に仕だって言うのか……………ってか街はどこ？」

周囲をぐるりと見渡しても、街どころか人影すら見当たらない。

「くうううううー！！！」

わけがわからず両手で頭をかきむしる。と、指に絡まった何かが顔から外れた。外れたそれをよく見ると、黒い紐に丸い何かがついている。

目の高さまで持ち上げてよく見てみる。

「なんだこれ。眼帯？ 何でそんなものが俺の目に？」

ここ最近視力は落ちたものの徹の目に異常は無い。今も普通に見えている。いや、やはり異常があった。

眼帯を持つ自分の左手が妙に小さく見える。

徹の体格は平均的な日本人とさほど変わらない。最近下腹の弛みが気になり始めたとはいえ、今見えているそれはまるで子供の手のような・・・。

「どうわわわああああー！ お、俺の手が小さくなってる！ ってこの声は？」

どうやら耳にも異常があるらしい。

今の声は普段聞きなれた自分の声などではなく、まるで子供の
- それも女の子のような？

ぽよん。

飛び跳ねる心臓を落ち着かせる為に胸に手を当ててみれば、思わぬ弾力が返って来た。

ぽよんぽよん。

- -
思わず両手で両胸を押さえてみると、双方の掌に異次元の弾力が

「どっしえええええええー!!」

（拝啓、国の御両親様。息子は知らぬ間に娘になってしまったよう
です！）

桐生徹だった少女の悲鳴が、風に乗って夕日の荒野に消えていっ
た。

第01話 オルテアの街

荒野を踏みしめて突き進む戦車に揺られ、かつて桐生徹だった少女はぼやいた。

結論から言えば、どうやらここはゲームの世界らしい。それも徹が熱中していたMMORPG『パンツァー・リート』の舞台、エイリシエルだ。誰かと会って確認をした訳ではないが、徹にはなぜか確信があった。

しかも、徹はゲームでプレイしていたキャラクターそのものになっていた。そろそろおじさんと呼ばれ始める男から中学生くらいの可憐な少女へ大変身である。

「これって、ゲーム世界に入ってしまったってやつ？　なんてお約束な・・・」

そうとしか言いようが無い。

驚愕の後いろいろ調べてみたところ（ドキドキ身体検査ポロリもあるよ偏の詳細は秘す）、そうとしか思えない現象に出会ったのだ。目の前に浮かぶ自分自身のステータス画面がそれだ。そこには徹がゲームで使用していたキャラクターが映し出されていた。

腰まである長い銀髪に翠の瞳。天使のように整った顔立ち。はっきり言ってかなりの美少女である。

年齢設定は17歳だが、童顔のうえに小柄な体格にしたので中学生くらいにしか見えない。しかし出るところはちゃんと出ている。その辺はバッチリだ。

マイキヤラの定番といえる旧ドイツ軍風ジャケットにミニスカート。ミニスカとオーバーニーの間の絶対領域が自慢である。左眼の眼帯は徹なりのチャームポイントだ。

写っていたのはキャラの立ち姿だけではない。

各種能力値や所持職業。ヒットポイントにマジックポイント。今も動いているパッシブスキルなどなど。

そして、自分の名前と種族。

クリステイナ・グイネヴィア・ロウゼン。種族：吸血鬼 冒険者
レベル100EX（転生者）。

「いきなり女の子になっちゃった挙句、吸血鬼かぁ・・・」

自分で設定したから解ってはいたが。

『パンツァー・リート』には銃だの戦車だの列車だのが登場するが、いわゆるファンタジー色も含む為、人間以外の種族も多く存在する。有名どころではエルフにドワーフ。他に獣人などなど。そして吸血鬼。

この世界における吸血鬼はアンデットではない。おまけに吸血するわけでもない。数は少ないものの立派なプレイヤー種族だ。

種族特性として、多種族より優れた身体能力がある。特に筋力は馬鹿力だ。他にはパッシブで働くHP回復とMP回復。HPもしくはMPのドレイン能力。夜闇をも見通す闇視能力などなど。

欠点と言えば、陽光の下では全能力値20パーセントダウンくらいだろう。徹のキャラには、眼帯をしていなければ周囲から無差別にHP・MPを吸収してしまう魔眼という独自の欠点（利点？）があるが。

最低でも五度転生しなければ選択できない特殊種族とはいえ、あまりに有利すぎる。プレイヤーからは息する厨二病種族と評されていた。

五度目の転生の後、徹は吸血鬼に種族変更してみた。

理由は至極簡単。吸血姫（姫ね姫）に萌えたからである。
吸血鬼の能力を使うとき、瞳が赤く光る所などなかなかカッコいい。

確かに萌えた。

自キャラが小柄で身長が低いと、妙に似合っていた記憶がある。
だがしかしである。

「自分がそれになるってのは、想定外だよなあ・・・」

美少女とは見て楽しむものである。わざわざ女性キャラを選んだのもそのためだ。

『パンツァー・リート』だけでなく、徹は他のゲームでも選択できるなら女性キャラを好んで選んだ。ネカマとかロリコンとかでなく、もともとと切実な問題 - 男の尻を見ながらゲームしてもツマラナイ - からである。

桐生徹は男なのだから、男より女の尻を見たいと願うのは健全な証拠だ。たぶん。

だが、間違っても自分になるものではない。自分の尻は見えないのだから。

何度目かの溜息をつき、桐生徹は戦車を走らせた。

思えばこの戦車を取り出したときもなかなかシユールだった。

ヴィークルボックスを開き、ゲームでいつも使ってきたマイ戦車ティガー？を『引っぱり』出す。

（なんと言うかね。ドラ もんが四次元ポケットから未来道具を取り出すイメージだね）

実際は何も無い空間に突如として現れるのだが、イメージとしてはまさしく四次元ポケットだろう。

ちなみにクリスティナのヴィークル欄は計10枠あり、バイクやらジープやら装甲車やらキャンピングカーやらトレーラまでがセツトされている。

もちろん第一枠はマイ機甲騎兵だ。

トレーラーにはさまざまな物資や整備道具機械などもろもろ搭載している。はつきり言って人間移動基地だ。

ほかにもアイテムボックスにウエポンボックス。それらのボックスから武器や鎧を選択すればとたんに装着できる装備欄。記憶した魔法やスキルの一覧表。魔法やスキルをすばやく使う為のショートカット欄などなど。

視界のそこかしこに『パンツァー・リート』のゲーム画面でなじみのウィンドウが浮かんでいる。

何らかの理由でゲーム世界に迷い込んでしまったのだろうか。徹は首を傾げる。アニメや小説ではお馴染みの設定だが、まさか自分に身に降りかかるうとは世の中侮れない。

問題なのは、万が一ここがゲーム世界だとしても、この身に感じる感覚は現実的なものだということだ。頬をつねればちゃんと痛い。仮に死に至るような傷を受ければ普通に死ぬだろう。リセットやゲーム的な復活があるとは思えないし試してみよう思わない。

さらに気になる点がある。

M M O R P G 『パンツァー・リート』に絶対ないと断言出来る相違点があるのだ。

「現在位置を表示せよ」

眼帯下の左眼を閉じ、誰にもなく命令してみる。すると『閉じた左眼の視界内』に大陸全体の地図が浮かび上がった。その一部に赤い光点が点滅している。おそらく現在位置だろう。

『パンツァー・リート』にも地図表示機能はある。最初は真っ白状態だが。

NPCから地図を購入して地図を埋めていく仕様になっている。地図作成スキルのレベルを上げていくと、キャラクターが訪れた場所を自動で地図に書き込むオートマッピングをパッシブで働かせることが出来るようになる。

自分で世界地図を完成するもよし、他プレイヤーやNPCから地図を購入するもよし。

地図を完成させる楽しみもゲームの内なのだが、今左眼に映っているのはほとんど完成されたゲームのものとは異なる地図だ。

しかも転生者の国とされていたジャポネス列島のデータが無い。地形は表示されているが白紙状態だ。

ジャポネスらしき場所を拡大していくと『No Data』と出た。

「ジャポネスの地図データは完成させていたハズなんだけどなー」

念のため、『パンツァー・リート』のマップ機能を表示してみる。想像通りこちらはほとんど白紙状態。ジャポネスはおろか、大陸地図すら表示されない。

唯一、荒野から現在地点までの周辺が書き込まれているだけだった。

「こっちは標準の地図。当然のように白紙状態。方や謎の地図。ある程度は書き込まれているが完全ではない。国別の色分けは無いわ、ジャポネスは白紙だわ・・・あ、隣の大陸も白紙か。とりあえず近くの街か村にでも行っている聞いて回るか」

徹が呟いた途端、謎の地図上に周囲の街のリストと街までの距離、

場所が表示される。

「・・・便利だ」

徹はティーガー？の進路を南に向けていた。

荒野にウンザリしたので海が見たかった。理由はそれだけだ。

ティーガー？の巡航速度は時速55Km。海岸線までは直線距離にして約500Km。途中の山間の街に立ち寄っても明後日には海が見えるだろう。ちなみに本物のティーガー戦車は最高速度で時速40Km弱ほどだ。

徹のティーガー？が、これほどの速さで走れるのは情熱を込めて魔改造しまくった結果だ。機関を魔動式の高出力な物に換装し、装甲に到ってはなんとミスリル合金製である。ワンマンシステムを搭載しているため、徹一人でも運転・攻撃が可能だ。自ら操縦しなくても音声入力で「指揮」することも出来る。

「にしても、リアル『パンツァー・フォー！』が出来るとわっ！」

感動する徹であった。

荒野の道なき道を突き進み、陽が沈む前に岩場のそばで停車した。夜通し走る様な無理はせず、徹はここで一泊すると決めた。

アイテムボックスから野営用のテント、簡易テーブルとチェア、キャンプセットを取り出しティーガー？の横に並べていく。

今夜の食事はポテト付きハンバーガーとピザ。魔法で暖めた夕食は湯気が立ち昇っていた。小型コンロに火をつけコーヒーを沸かす。

ちなみにコーヒ―は「ポット入りお徳用三人前コーヒ―」。ハンバーガーやピザ同様、食料アイテムだ。

「味は悪くないどころか美味しいや。ゲームデザイナーに感謝感謝だな」

ほかほかハンバーガーを齧りつつ、徹は独り言ちた。

アイテムボックスには大量の食料アイテムが買い溜めしてある。

当分の間は食べ物には不自由しないだろう。

『パンツァー・リート』では、キャラクターに定期的な食料アイテムの使用を強要していた。

ゲーム時間で十二時間、まったく食事を取らなければ体力ゲージが低下し、ステータスやHP・MPが減少する仕様になっている。

一週間無食事なら全ステータスや移動力が一割以下まで下がってしまう。

アイテムボックス枠を消費する食事システムに、不服を持つプレイヤーは多かった。

最初はめんどくさい仕様だと文句もあつたが、今となつてはデザイナーに感謝の念が湧き上がる徹。我ながら身勝手なものだと苦笑した。

食事アイテムにはステータス微増などの特典付きの物も多く、序盤以降は取り忘れることも無くなつたがそれはそれである。

思えば妙な所でリアルに拘っているゲームだった。

食事がそうだしキャラクターの睡眠もそうだ。ゲームプレイ中にキャラクターの睡眠まで要求している。

プレイ中は一日一回、ゲーム時間で最低四時間の睡眠が必要とされた。二日徹夜すれば、ステータスや体力ゲージの回復力が低下したりする。

プレイヤーにしてみれば、僅かな間とはいえまったく行動出来な

くなる無駄な時間という。さらに下手な場所で睡眠を取れば、モンスターに襲われるといったデメリット付きである。なんとかしてこれとの改善要求が出されたのも当然だろう。

多数のプレイヤーからの改善要求に対し、運営からの回答は、キヤンプセツトや寝巻き、高級布団に快眠枕などのアイテム充実だった。あまりの斜め上っぷりに、徹もギルドメンバーも大笑いしたものだ。

狩りや戦闘以外の部分も楽しんでほしい、と言ったのが運営の方針なのだろう。

食事を終えたころにはすっかり陽も沈み、夜の帳が降りていた。

ここが森の中であれば、虫の音や風に揺れる木々の葉音が聞こえるのだろうかあいにくの荒野。ほとんど音はしない。せいぜい風の音くらいだ。

コンロの火も落ちてあるので、光源といえば星くらいのものだ。

徹はティーガー？の上に腰掛け、なにをするでなくただ夜空を見上げていた。満天の星空が頭上に広がっている。

おかしいものだと思う。少しも孤独を感じないからだ。

ゲームで知っているとはいえ、リアルで見知らぬ世界にわが身ひとつで投げ出された。突如家族や日常と切り離されれば、あまりの孤独感に押し潰されても不思議はないはずだ。ましてや星明りしかない暗闇の中にいるのである。

常人なら光を求めて火を熾すだろう。この世界には魔法もあるのだから、光の魔法を使うという手もある。

徹はそれすらもなかった。視えたからだ。闇の中だというのに、夜の暗闇の中にいるということは感覚でわかる。あたりが真っ暗なのも理解している。だがしかし、昼間のように見えるのだ。徹的には「曇りかな？」程度で少しも恐れを感じない。それどころか、母親の胸に抱かれたような奇妙な安心感に包まれていた。

「そう言えば、吸血鬼、特に女吸血鬼は夜の女神イシュペルデーの娘と評されるほど夜に愛されているとかって設定だったな」

ゲームにおける種族設定の一文を思い出す徹。

となれば、これは吸血鬼の種族特性【闇視】なのだろうと思い至った。わずかな光が必要な【暗視】と違い、【闇視】は完全な暗闇でも周りを見渡せる種族特性能力だ。吸血鬼やドワーフ以外では魔物しか持つておらず、成長で身につけることも出来ないレア能力なのである。

やはり自分はクリステイナになってしまったのだと納得してしまった。途端に何かガストンとはまった様な感覚がした。

（今はさよなら、桐生徹。こんにちは、クリステイナ）

かつての自分に別れを告げ、新たな自分としてこの世界で行きっていく決意を固める。

闇を見通す瞳で夜空に輝く星を見上げる。こんな夜もオツなもんだねと戦車の上で横になりつつ、もはやクリステイナになった少女は睡魔が訪れるまで星空を見上げ続けた。

翌朝、クリスはサンドイッチとコーヒーで軽い朝食を済ませ、早速戦車を走らせた。

謎地図で現在位置を確認する。あと100Kmも走れば目的地であるオルテアの街に到着するだろう。

オルテアの街は、経験値稼ぎにも素材収集にも適しているストーンメイス山脈の麓から港街につながる主要街道のなかばに位置する城塞都市だ。加えて、西には初心者から中盤プレイヤーまで幅広い狩場を提供するコランド高原が広がっている。多くのプレイヤー達にとって、交通の要所であると共に交流の場でもあった。

街のメインストリートに立ち並ぶプレイヤー露店からは威勢のいい客引きや勧誘の掛け声が飛び交い、素材やアイテムを求めるプレイヤーが集う。

普段から人の行き来で賑わう活気の絶えない街。それがオルテアだ。

「今夜はベットで寝れるかねえ。その前に情報収集か。ここは本当にエイリシエルなのか、夢か幻か、はたまた電腦世界なのか。俺以外のプレイヤーがいるかどうか……。とにかく誰かと話が出来れば、その辺のこともハッキリするだろう。おっと、所持金の確認しとかなきゃ」

街中で何をするにしても資金が必要になる。

金がなければホテルに泊まることも食事することも出来ない。せっかく街にたどり着いたのに、公園で野宿する羽目になるのは回避したいクリスだった。

テストからゲームを遊んでいたため、金はそれこそ売るほど持っている。ゲーム内での金だが。問題はその金を現実に取り出せるかどうか、出せたとして使えるかどうかだ。

懐に手を入れ、財布から現金を取り出すイメージをするクリス。札束が出てきた。

100ペリル札が100枚。日本円に換算すればおよそ100万円になる。

「現金はOK。あとはこれが使えるかどうかだけだ」

仮に使えなくても、無用の装備品を売れば当座の生活に困らない資金が手に入るだろう。なににせよ、野宿ではなく文化的な生活を送れるはずだ。

ほっと一息つく。

しかし、それは一時しのぎにしかない。稼ぐ方法も考えたほうがよさそうだ。

普通に考えれば、冒険者ギルドに登録し依頼をこなして行くのが一番手っ取り早い。ここが『パンツァー・リート』の世界設定と変わらないのであれば、世界は謎の生命体『蟲』の脅威に晒されているはず。冒険者ギルドに行けば仕事には事欠かないだろう。クリスはそう結論づける。

「なににせよ、まずは街に着いてからだな。シャワー浴びてメシ食ってやわらかいベッドでぐっすり眠って・・・たしかオルテアの街に大浴場あったよな。日本人なら風呂に入らねば！」

期待に胸を膨らませ、はやる気持ちを抑えることなくティーガーを爆走させるクリス。

そして期待は見事に裏切られた。

街は廃墟となっていたからだ。

『蟲』の侵攻を食い止めるべく建設された幅10メートルを越える城壁は、あちこち崩され、地面に瓦礫の山を築いている。日の出とともに開放され、普段なら人や物の行き来きで賑わう北の城門だけが冗談のように硬く閉ざされていた。

崩れた城壁から覗く街の景観は無残としか言いようがない。倒壊した家屋、崩れた建造物。石畳の路面はあちこちはがれ、所々むき出しの地面が覗いている。

地球世界のテレビで見た、紛争地帯真っ只中の街並みもかくやと

いった有様だ。

「『蟲』の大侵攻にでも襲われたか？ ゲームでも時たまあったよな、そういえば」

『蟲』の大侵攻は、ストーンメイス山脈近郊にある街や村で時折行われる都市防衛イベントの一種だ。

どんなフラグを踏めばイベントが始まるかは不明だが、いずれかの街で発生するこのイベントをうまく裁くことで都市の発展度が上昇、新たな上位アイテムを購入できるようになる。

イベント中に『蟲』が落とすドロップ品も普段より良い物が多く、俄然プレイヤー達も本気で取り組んでいた。中には騎士団を結成し、防衛専門ギルドを立ち上げる猛者達もいたほどだ。

ヴィークルボックスを開き、ティーガーからバニーに【乗り換え】え、クリスは廃墟の街に入った。

バニーとは、バイクに手足をつけたような魔動機械だ。乗員は一名。小回りが利き、バーニア噴射やワイヤーガンで立体的な機動が可能で、ベテランプレイヤーにも愛用者は多い。

標準武装は12.5mm魔動機銃一門だけだが、人間用の兵装を手に入兵戦も可能だ。

クリスのバニーは、魔動機関と足回り、バーニアを強化したスペシャルである。

バニーを駆って廃墟を突き進むクリス。

障害物があればかわし、あるいは飛び越えグングン進んでいく。目的地は街の中央にある時計塔だ。領主の居城がある丘をのぞけば街一番の高層建築物で、そこからならオルテアの街全体を見渡すことが出来るとクリスは考えていた。

MAXスピードで塔の間近に接近するとバーニアを最大出力で噴射、上空に飛び上がる。バーニアのバーニアはなかなか強力で、ノーマルのものでも三階建ての建物くらいなら飛び越えることが出来る。しかし、バーニアを強化してあるクリスのバーニアでも十階建てのビルの高さに相当する時計塔の半ばがやっとだ。

バーニアを軽く噴かして壁に叩きつけられるのを防ぐ。それでも殺しきれない衝撃はバーニアの手足を使い吸収。慣性が効いて壁に張り付いたままの機体が重力に引かれる前に再度バーニア点火。二段ジャンプでさらに上空に飛び上がり時計塔の屋根に着地する。

時計塔の屋根はかなりの傾斜で足場が悪く、クリスはレッグが滑り落ちないようワイヤーガンを屋根に打ち込み機体を固定した。念のため、バーニアのアームで時計塔の天辺にあるポールを掴んでおく。

「ふひー。リアルで初めてのバーニア操縦でここまで出来るなんて、やるじゃん俺。・・・まあ、普通に考えれば【操縦：バーニア】スキルが効いてるんだろうけど」

出でない冷や汗をぬぐい、バーニアに跨ったまま街の景観を見渡すクリス。

完全に倒壊した建物三割。半ば崩れているもの五割。無事な建造物は全体の二割にも満たない。とくに街の北側に被害が集中している。

「あゝ。完璧に廃墟だなあ。オルテア落とされるなんてどんな大物が出たんだ？ 一時避難というより完全に街を捨てたって感じがするし、住人達どこに行っただろ」

クリスの記憶にある限り、拠点としてのオルテアには強固な防衛機構があったはずだ。並みの侵攻なら配備された自動兵器で十分街を守りきれ。加えて常駐する軍隊にプレイヤーも相当数いたはず。

なのに街の放棄にまで追い詰められたとは。

それにしても『蟲』が一匹もいないとはどういう訳か。クリスは首を捻った。

『蟲』は攻略した地点にコロニーを造り、そこを拠点にして数を増やし自分達の領土を拡大していく。街のこの有様が『蟲』の侵攻によるものなら、そこいら中『蟲』だらけになっただけになってもおかしくない。

【遠視】の魔法も使ってさらに詳しく調べる。

さらに【探索バード】を十数羽作って周囲に放った。これは魔法で作る鳩のような姿をした擬似生命体で、内包する魔力を使い切るまで術者の目となり耳となって広範囲を自動で探索してくれる便利魔法だ。

直接見える範囲は【遠視】で視認。加えて街中に放った【探索バード】からさまざまな情報が送られてくる。

結果、ますます首を捻るクリス。

気になるのは街のあちこちに放棄された戦車や機甲騎兵、自動兵器の残骸だ。

破壊され朽ちかけたこれらを見るに、街中で戦闘が行われたのは間違いない。が、相撃ちや互いを攻撃しあった状態の物があるのはどういうことか。それも一つや二つではない。誤射ではありえない。自動兵器は街の防衛機構の一種であり、『蟲』の侵攻から街や住民を護る為に存在する。その自動兵器が軍隊や冒険者達と戦ったというのはかなりの異常事態と言える。

最大の懸念事項は、オルテアの街が放棄されたのが数十年前であろうと言うことだった。

建築物の傷み具合。屋内に積もった埃や砂塵。破壊された魔動機

械の錆び具合。戦闘に巻き込まれ死亡したらしい白骨化した人骨。どれもこれも、ここ数年での出来事とは思えない。

クリスの【知識】はそう告げている。

クリスがこちらに来たのが昨日。

システムアップデートとそれに伴うサーバーのメンテナンスで、ゲームにログインできなかったのが三日程。それ以前は普通にプレイできていた。

事実、つい一週間前は酒場でギルメンたちと無駄話に興じていたのだ。ここオルテアの街で。

「・・・時間がずれている?」

クリスの呟きは風に乗って消えていった。

第01話 オルテアの街（後書き）

趣味の赴くまま書いてます。

誤字・脱字ありましたらお知らせください。

H23/09/04 一部修正

第02話 機甲騎兵といっしょ（前書き）

お、お気に入りか8件も。嬉し泣きして良いつスかつ！

第02話 機甲騎兵といっしょ

M M O R P G『パンツァー・リート』

いわゆるファンタジー世界に科学的要素「魔動術」を持ち込んだ、剣と魔法と銃と機械が存在するオンラインゲームだ。ゲームとしては後発で、一番の目玉は様々な騎乗動物や乗り物を駆りクエストを進めていくことだろう。

様々に登場する装備品や搭乗機械に騎乗動物。機械や魔法のカスタマイズも魅力のひとつだ。魔法に至ってはまったく新しいオリジナル魔法を作ること出来る。

中世的な世界観と、20世紀初頭の頃の科学的要素が混ざりあう不思議な世界エイリシエル。それが『パンツァー・リート』の舞台だった。

『パンツァー・リート』はクラス制を使用している。

システムはクラス制だが複数のクラスを獲得可能だ。【戦士】と【魔術師】を組み合わせ、魔法戦士としてプレイするといった具合に。

各職業には装備できる武器防具に制限があり、なんでもかんでも組み合わせればいいという訳でもない。例えるなら【魔術師】は装備できる防具にかなりの制限があり、身体の動きを阻害する皮鎧以上の防具を装備すると魔法が使えなくなる。

【戦士】や【剣士】と組み合わせるなら薄い防具は致命的だろう。かと言って、分厚い装甲の金属鎧を装備すれば【魔術師】が無駄になる。その点、鎧制限の無い【神官】と組み合わせるほうがベターだ。所謂神官戦士である。

無論、薄い防御を承知で魔法戦士をプレイする猛者も多い。

【戦士】や【剣士】、【魔術師】【神官】などの所謂冒険者として必要な職業を冒険者クラスと言い、他の職業は一般クラスとして区別されていた。冒険者クラスには【賢者】や【指揮官】などの知識系や補助系も含まれる。

各職業の最大レベルは100レベル。さらに各職業にはレベルに応じたスキルがあり、そちらは最大10レベルとなっている。このスキルレベルがダメージや回復量などの威力となる。

クラスの所得数に制限は無いが、各クラスには能力補正值が設定されていて、補正がかかるのは三つまでだ。これを常設クラスと言う。常設クラスに設定していないクラスのスキルは使用できない。

これはキャラクター作成時の場合で、レベルが上がると最大7クラス常設が可能となる。能力補正がかかるのはやはり三つまでだが、使用可能なスキルを増やすことが出来る。

『パンツァー・リート』は自由度が高い。

狩りや戦争など、戦闘とはまったく縁のない遊び方にこだわる者も多い。代表的なのは商人だろう。

エイリシエルでは地方によってアイテムなどの物価が異なる。さらに都市の発展度や季節によっても変動する。この価格差を利用し、商売を始めるプレイヤーが多くいる。

ゲームでは資金を出せば街に『商店』を出すことが出来る。

自分の店を開く商売に勤しむ者、さらに大規模に各都市にチェーン店『商会』を築く者もいる。

大型トラック十数台でキャラバンを組み、フィールド上で露天（この場合はバザーと呼ばれた）を出す猛者までいるほどだ。

職人道を突き進むプレイヤーも多い。

製造スキルを駆使して様々なアイテムを作ることができるのだ。

戦闘に役立つ各種ポーションを製造する【錬金術師】、武器や防具を製造する【鍛冶師】は当然として、【音楽家】や【陶芸家】【

家具職人」として自分の作品を世に出そうとする者もいる。

ポーションや装備の類と違い、これらゲーム的な要素の低い作品が売れるかは、ひとえにプレイヤーのセンスにかかっているが。

狩りや戦争に勤しむ者。自分の趣味に生きる者。冒険そっちのけで一般クラスを極めようとする者。

『プレイヤーの数だけ楽しみ方がある』とは運営のキャッチフレーズだ。

そしてここに、【魔術師】として魔術を行使することだけを楽しんでいる者がいた。言わずもがなクリ스티ナである。

「【爆炎球】！」

形成された炎の球が掌より撃ち出され、100メートル先の戦車の残骸に着弾。超温の熱で溶解した残骸がばらばらに爆発四散した。

「続いて【雷撃槍】！」

指先より解き放たれた紫電の槍が半壊した建造物を貫き、完全に瓦礫に変える。

調子に乗って魔法を連発するクリス。炎が雷撃が氷の槍がカマイタチが光の槍が吹雪が怒涛のように荒れ狂った。

「止めだ！ 落ちよ神鳴りっ！ 【閃轟雷撃陣】！」

街の上空に巨大な魔方陣が展開する。魔方陣から解き放たれた無数の雷撃が地上へ豪雨のごとく襲い掛かった。雷撃を受けた幾棟のビルが崩れ落ちる。石畳で舗装された道路が抉れ消し飛んだ。只一人の人が成し遂げたとは思えない惨状がそこにあった。

クリスは無意味に破壊活動が続いていた訳ではない。

「いいいいいいいいいっつっつやっはあああああ——
——！！！！！」

無意味ではない。

[illegible]

繰り返すが無意味では決していない。

時計塔から見下ろした街の有様に、クリスは記憶していたエイリシエルとは異なる現実があることを理解した。

廢墟と化した城塞都市オルテア。軍や冒険者と争ったらしい自動兵器群。何が起きたか分からないこの世界の中で生きていくため、クリスは自分を見つめ直すことにした。

そこで何故無数の魔法をぶつ放すのかと言えば、これにもちゃんと理由がある。

自分に何が出来なのか、どれだけの力があるのか知っておくこと。
要は「自らのスペックの再確認」だ。

プレイヤーとして、ゲームキャラ「クリスティナ」の能力は熟知していたが、この世界での現実としての「自分」は未知数だった。

「である」と「だろう」は本質的な意味において異なる。

早急に「自分」を知る必要があったのだ。もつとも、そこで大魔法を連発すると言うのがクリスティナという人物の全てを表しているのだが。

結果としては「ほぼ」ゲームと同じ。

装備の取り扱い、体術や戦闘スキルも思うように扱えた。仮に魔

物や自動兵器に襲われようと遅れをとることは無い。

攻撃魔術の確認も充分すませた。クリスの目前に広がる破壊の跡がその証明だった。ほんのちよつとのストレス解消を含めて遠慮なく魔法を連発した成果である。

クリスは思いもしないことだが、実はこれはかなり異常なことだ。なぜなら、世の魔術師はこれほどの魔術を数十発連射することなど出来ない。そもそも精神力がもたない。

魔法は使えば当然のごとく精神力を消費する。しかし、これだけの魔術を解き放つてもクリスの精神力はわずかしこ減っていなかった。宮廷魔術師ですら裸足で逃げ出す恐るべき精神力容量だ。

十二分に攻撃魔法をぶちかまして満足したのか、クリスは次の魔法に取り掛かる。

【浮遊】や【飛翔】などのいわゆる便利魔法。【防御】や【障壁】、【多重結界】などの防御魔法。怪我をしてないので実際効果があったかは判らないが、【治癒】などの回復魔法も試してみた。

「やー、我ながらチートだねえ。こんだけ魔術使ってまだ全MPの一割も減ってないとは」

自分のステータス画面を見つつ思わず呟く。

魔術の確認にひと区切りつけ、ちよつと休憩とばかりにコーヒープレイクのクリス。

時計塔から下りた後、クリスは時計塔隣の神殿跡にキャンプを設置した。一部壁が破壊され、二階の床も一部抜けて半ば吹き抜け状態になっている。床板も朽ちて基礎が剥き出しになっていたが、しっかりした造りの建屋自体は無事で雨風は十分に防げる。

そこにティーガー？と方膝を着いた駐機状態の機甲騎兵を並べ、

簡易テーブルとチェアを挟んだ反対側に大型のキャンピングカーを置いた。

「キャンピングカーのこと忘れて風邪引きかけるなんて、なんてお馬鹿な」

思わず苦笑する。

戦車の上で寝てしまい、あまりの寒さに飛び起きたのは夜も明けきらぬ早朝のこと。

内陸部の荒野の昼と夜の気温差は激しい。危うく凍死しかけるといふポカもいい経験だと、熱いシャワーを浴びながら無理やり納得したクリスであった。

「さあて、いよいよメインイベントー！ 楽しい楽しいマイ機甲騎兵の試乗と行きますか！」

テーブルにマグカップを置き、いそいそと機甲騎兵に駆け寄る。

クリスの装甲騎兵は、全騎兵中もっとも重装甲のティエレシリーズをベースに改良を加えたカスタム機、ティエレDだ。ただでさえ重装甲のティエレに更に装甲を増強。さらにさらに両肩に大型のラウンドシールド、両腕にアームシールドを備え、背面のバックパックに戦車砲にも使われる56口径魔道砲を搭載し重武装重装甲化している。

漢の武器、パイルバンカーも忘れてはいけない。

機甲騎兵は通常、全身鎧を着た騎士を連想させるスマートなシルエットを持つが、ティエレシリーズは少々様相を異にする。例えるなら、戦車を無理やり人の形にした姿というべきか。

一言でティエレシリーズを表すなら「無骨」あるいは「金属塊」だろう。そのためプレイヤーからは「かっこ悪い」と評され人氣が

無かった。重装甲で動きが鈍いのも原因だ。

クリスのティエLDは更に重装甲を施し、その姿は異様とすら言えた。そこに57口径魔道砲である。もはや動く砲台だ。

全高6メートル強の雄姿を誇るその愛機にうつとりとした視線を注ぎ、機体背後に回るクリス。

機甲騎兵の操縦室は背面にある。これは全ての機甲騎兵に共通している仕様だ。

戦闘時は機体の正面を相手に向ける為、背面に操縦室を設置したほうがパイロットの生存率が上がる。操縦室を背面に確保する関係で、機甲騎兵は背中に大きなバックパックを背負った形になっていた。

垂直飛びの要領で、ぴょんと操縦室の上に飛び乗るクリス。小柄な身体からは想像できない脚力だった。

操縦室の天井には戦車のそれと同じような展望塔があり、パイロットは展望塔上面の搭乗ハッチから操縦室に入る。クリスもハッチを開いて身を滑り込ませた。

機甲騎兵の操縦室はシート正面と左右に外の景色を映し出す映像盤、その周囲に機体情報をパイロットに知らせる各種計器類が渾然と並んでる。正面の映像盤の下にバイクのハンドルの様な操縦桿があり、引き上げ水平のグリップを縦に起こせば始動準備が整う。逆に最後まで押し込めば、自動で駐機状態を取るようになってる。

機甲騎兵には、前進後退などの基本動作以外の操縦法は存在しない。それ以外の、例えば戦闘などはイメージ入力式により機体を動かす。操縦桿を握り動きをイメージすれば、騎兵の頭脳であるマギスジェムが操縦者の意思を読み取り機体はその通りに動く。

動かすだけなら素人でも可能だが、戦闘となるとパイロットの技量が物をいった。

「おおおおおー！　いよいよ感動のドライブ始動ですよー！」

四点ハーネスで自身をシートに固定し、逸る鼓動を抑え操縦桿を引き上げる。カチツという音と共に固定された。

「アークドライブ始動！」

機甲騎兵の心臓、アークドライブが低い唸りをあげて起動した。アークドライブが周囲のマナを収集し魔力に転換、機体各所に伝達していく。

音と唸りは徐々に大きくなり、操縦室のシート越しにクリスの身体にも振動を伝える。映像盤に灯が入り外の景色を映し出した。マニア好みのアナログ計器が一斉に動き、針を揺らす。

紋章機関が呪力詠唱を開始し、機体の超重量を緩やかに相殺していく。内部機関が押しつぶされないよう連結して支えていた装甲板と関節駆動部のロックがはずされ、機体がゆっくりと立ち上がる。

「おおおおー！　本物だ！　本物のロボットが動いてる！　本物のロボットを動かしてる！」

現実にロボットを操縦しているという事実、胸を躍らせる狂喜乱舞するクリス。

操縦桿のグリップを握り締め、自らを落ち着かせるため深呼吸すると機体を一步前進させた。鋼の脚が一步を踏み出す。

「こ、この一步は小さな一步だが、私にとっては大きな一步である！」

鋼鉄の脚が大地を踏みしめる感触をシート越しに感じ、感動に打

ち震えるクリス。さらに歩を進め、野外に進み出た。

倒壊した建築物の残骸を迂回しずんずん進む。やがて大きな道路に出くわした。北門から領主の居城のある丘を掠めるように南門へと抜けている中央道路だ。ところどころ車両の残骸が転がっているが、道幅40メートルを超える大通りが眼前に広がっていた。当然のように人通りは無い。

クリスの脳裏に天啓が閃く。

「これはあれかつ！ あれをやれと言っているのだな！」

機甲騎兵の脚部には高速移動用のローラーギアが装備されている。短時間ではあるが、最高時速100Kmオーバーでの高速機動が可能なのだ。

現代の戦闘が視認による照準である以上、既存兵器では予測困難な機動をする機甲騎兵の相手をするには力不足だ。機甲騎兵の機動に照準が追いつかない。それに加え、アークドライブ稼働中の機甲騎兵には、魔法を含めた射撃攻撃に対する強固な防御フィールドが展開される。遠距離攻撃では効き目が薄かった。

機甲騎兵を相手にするには、同じ機甲騎兵でもって白兵戦を仕掛けるのがもっとも有効なのだ。

高速機動と防御フィールド。この二つこそが機甲騎兵をして陸戦兵器最強と呼ばしめる所以だった。

さて、クリスのティエレDだが、当然のことながらローラーギアが装備されている。だが、必要以上の重装甲が災いしてその速度は他の機甲騎兵の半分も出ない。

重装甲で防護こそ硬いが、攻撃を受け続ければいつかは沈む。紋章機関による重量軽減でも殺しきれない超重量が最大のネックだった。

そこでクリスは考えた。
いつそのこと、強引にでも浮かせてしまえと。

超重量機体でのローラーギアへの負担を軽減するため、各部に配置したスラスタを地面に向けて噴射し機体を持ち上げる。脚部のローラーギアと背面に設けた大型スラスタにより高速で大地を駆けぬける。云わばホバーとローラーギアの二段構えだ。

無論、このような無茶をするには通常のアークドライブでは出力が足りない。問題を解決するため、クリスのティエレDには特殊なアークドライブが搭載されていた。

プレイヤーの間でもパイロット殺しとして悪名高い「レッド・チャペル」。

マナの収集率と変換率に優れ、比類なきパワーを生み出す特殊アークドライブ。だがレッド・チャペルはパワーを生み出すため搭乗者の精神力を強制的に流用する。それでも足りなければ生命力も奪っていく。それも半端ない量を。

「レッド・チャペル」をして流血の福音とはよく言ったものだ。

レッド・チャペルを搭載した機体で戦争に参加したプレイヤーは、墜とされるより「ガス欠」でリタイアする者のほうが多かった。ドライブ自体の重量も重く、搭載できる騎兵も限られるうえにいつ自滅するか分からないカミカゼ仕様。それがレッド・チャペルと言うアークドライブだ。

レッド・チャペルは高難易度クエストの報酬アイテムだが、入手に苦勞する割りに使えないアイテムベストテンに堂々ランクインしている。ゆえに予備も含めて入手はたやすい。

余談だが、ベストワンは魔法騎士変身セットである。入手に苦勞

ミラクルナイト

するレアアイテムでありながら、防御修正やら能力向上やらの付加価値が一切無い完全なネタ装備だ。だが、これは一部に根強い愛好者がいるため、使えないアイテムではあるが流通量は少なく取引価格も高い。

衣装は複数用意されているので、全品コンプリートを目指し何度モクレストを受けるプレイヤーもいる。どの衣装が当たるかは完全ランダムだからだ。

ただし、この変身セットの取り扱いには注意が必要である。何せ性別を問わず装備・変身可能なのだ。おまけに魔法少女物の定番として、エフェクト付きで脱げ、全裸になってから魔法騎士^{ミラクルナイト}の衣装を身に纏う仕様になっている。つまり、男キャラの場合でも以下同文。大顰蹙である。

さらに余談だが、魔法騎士^{ミラクルナイト}の衣装は全てスカートかレオタードとなっている。

男が身に纏えば以下略。

閑話休題

高速機動の間、ずっとスラスターを吹かし続けなければならないティエレD。他の機甲騎兵と違い、移動するだけで大量のMPを消費する。

それに加え、ティエレDには更なる加速を得るため、背面に推進用の大型スラスターを四器搭載していた。これがまた大量のMPを消費する。おかげで最高時速300Kmオーバーという馬鹿スペックではあったが。

あまりにピ・キー仕様の見事な仕上がり、ギルド仲間からも大絶賛だ。「そこまでやるか」「お前バカだろ」「いつそ機体を赤く塗れ」「角生やせ」など、惜しみない賞賛が送られた。

そのティエレD、大通りを右へ左へ北へ南へ絶賛暴走中である。何度の何度も大通りを往復している。

[illegible]

最高速度ではあっという間に街の端に到達してしまうため、程よいスピードで駆け廻っていた。

機体を右へ左へ揺らし、障害物の残骸をかわすためわざわざローリングをかましつつ爆走を続ける。途中からは展望塔から身を乗り出し、直接その身で吹き荒ぶ風を感じたりと躁状態で。

「それ」のセンサーが反応を感知したのは、あるいは偶然だったのかもしれない。

新設計の先行試作機である「それ」は、最終テストのため、単独での走行試験の最中だった。反応があつたのは、人間が言う所の城塞都市オルテア近郊を通りかかった時だ。

「それ」に搭載されたセンサーが従来型より高性能でなければ。巡回パトロール機でなく、トライアル中の「それ」が今日この時にオルテアに差し掛からなければ見過ごされていただろう反応。

人間達が扱う魔動機械、機甲騎兵の反応だ。

オルテアの街周辺の土地は、マナを多く含む鉱石の埋蔵地帯であり、街全体が魔力溜まり――所謂天然のチャフ状態となつて「彼ら」のセンサーを阻害する。

巡回パトロール機では街中に入らなければ感知できなかっただろう。

「それ」は独自の判断でトライアルを中止する。

人間の殲滅は「彼ら」の基準で優先順位第二位に位置しているからだ。現時点では最優先事項である『蟲』の殲滅の為に「彼ら」の戦力のほとんどを割かれており、人間の街に攻勢をかける余裕が無い。かと言つて見過ごせる事態でもない。

「彼ら」のテリトリーに無謀にも入り込んだ人間の存在を許してはおけない。

人間は「彼ら」にとつて、打ち砕くべき破壊目標なのだから。

「それ」にとつて人間が操る機甲騎兵など問題になりえない。

高出力のAMF（アンチ・マギリング・フィールド）を展開すれば、機甲騎兵の防御フィールドの効果は半減する。人間が魔法に頼る戦いをする以上、AMFはどこまでも有効だ。攻撃手段の大半を封じることが出来る。移動力も激減するだろう。

高速機動を封じられ、防御力も落ちた機甲騎兵など「それ」にとつてはただの的にすぎない。装備された副武装で十二分に対応可能だ。主兵装の電磁投射砲ならば1Km先からでも機甲騎兵の装甲を貫ける。

なにも問題は無い。障害などありえない。

「それ」は進路をオルテアに向けた。

無粋な侵入者に死という真実を与えるために。

第02話 機甲騎兵といっしょ（後書き）

書き溜めたのはここまで。次話の更新からはちよつと時間が空くと思います。

H23/09/04 サブタイトル変更 話数書き忘れ・・・一部
訂正

第03話 はじめての実戦

街に接近する大型の自動兵器を探知したのは、夕暮れ間際のことだった。

太陽もだいぶ地平線へと傾き、注ぐ陽の光も赤色を増して廃墟の街並みをオレンジ色に染めている。

クリスが放った【探索バード】は街中に人気がないのを確認すると、半分を残して街の外延部へと向かった。残った半分は都市内部を巡回し探索を続けさせている。

【探索バード】を外へ向けたのは、誰か街に近づく者はいないか調べるためだ。自動兵器を警戒しない訳ではないが、主な目的はあくまで街を指しているだろう人だ。なにせこの街、いろいろなお宝が残されている。

ちゃんと整備すればまだ使えそうな魔動機械。攔坐した自動兵器や車両、機甲騎兵の残骸。そしてなにより街中の貴金属店に残された宝石類。

逃げるときによほど急いでいたのだろう、その手の店には持ち出せなかった様々な商品が無造作に転がっていた。

大通りに面したいくつかの店に商品は残っていない。

逃げる時に持ち出せたのではなく、後日何者かが持ち出したのだろう。その痕跡が残されていた。

人が居なくなったらオルテアの街に侵入し、高価なものを持ち出す。盗賊か盗掘屋の類だろう。

無事街に潜入し、首尾よくお宝を手にしたはいいが何者かに発見され（おそらくは自動兵器）、お宝が詰まった袋を手にしたままの

白骨死体もあつた。

なにせよ、欲の皮が突つ張つた連中は自身の命を天秤にかけてでもお宝を求めるものだ。オルテアの街にまだまだお宝が残されている以上、漁りに来る連中は居るだろうというのがクリスの考えだった。

そついつた連中と接触できればいろいろな情報が手に入る。情報料を払つてもいいし、場合によっては護衛に雇われてもいい。とにかく情報がほしかった。

クリス自身が記憶しているエイリシエルとは異なるこの世界。廃棄された街。人間に牙を向いたらしい自動兵器群。原因が判つたからどうにか出来るというのではなく、判らないままでは収まりが悪い。ただそれだけの理由だ。

無論、誰かに合いたいという事もある。

人が訪れるのを期待していたのだが、やってきたのは自動兵器だ。数は一機。

【探索バード】からの連絡で、ハイ状態で突つ走っていたクリスはティエレDを急停止させる。高揚していた気分が一気に冷却され頭の芯が冷静さを取り戻した。

視界の隅に【探索バード】から送られてきた映像が映し出される。そこには見慣れない六脚式の自動兵器の姿があつた。

「んー。こんなの見たことないなあ。なんかサソリみたいだ」

巨大な胴体から伸びる一対の太い腕。胴体を支える三対の鋼の脚。胴体後部に設置された巨大な砲門らしき物が、反り返る尾のように見える。まさしくサソリだった。

クリスの記憶にある自動兵器は、曲線を多用し、細部に装飾が施

され丸々つとしたどこか古臭いイメージを感じさせたのだが、今写っているそれはまったく逆だ。シャープで先進的な印象を受ける。

サソリ型の自動兵器は、土煙を上げつつ真っ直ぐにオルテアの街を目指していた。

自身の脚を動かして移動しているにしては高速だ。映像を拡大してみると脚は動いていない。脚の先にローラーギアに相当する機構があるのだろう。滑るように近づいて来る。

「自動兵器がローラーギアねえ。機甲騎兵から学んだのかな」

少なくとも、クリスがローラーギア機構を組み込んだ自動兵器を見たのは初めてだ。

クリスの記憶では、ゲーム内の自動兵器は律儀に自分の足をシャカシャカ動かし移動していた。自動兵器が作られた目的は『蟲』からの都市防衛だからだ。

攻撃はプレイヤーに任せ、遠距離から『蟲』を狙い撃ちする砲台としての防衛兵器。それこそが自動兵器の役割だからだ。

クリスは知らないことだが、自動兵器がローラーギアを装備し始めたのは、人類に対し反旗を翻して半年後のことだ。

人間の街に侵攻するには移動速度が重要になってくる。

いくら物量に勝るとはいえ、元が防衛兵器ではどうしても侵攻速度が遅い。おりしも第一波攻撃で混乱した人間側が混乱から立ち直り、組織立って都市防衛を固め始めたところだ。思うような侵攻速度が得られなくなってきた。

制圧した都市こそ奪われなかったものの、速度で勝る機甲騎兵に引っ掻き回され壊滅した部隊も多い。

人類側にとって運が悪かったのは、大規模な反抗作戦が間近に迫

った直前に、ローラーギアとAMFを装備した自動兵器の大部隊による電撃戦が行われたことだろう。

AMFを装備した自動兵器の大軍に、人間側はなす術もなく敗れ去った。

主要な攻撃手段である魔法を封じられ、防御フィールドを弱体化されては反撃すらままならない。逃れようにも速度で勝る自動兵器からは逃れきれなかった。

反抗作戦のため部隊が集結していたのも仇になった。ろくに動けない機甲騎兵は体のいい的だ。攻撃能力を封じられた戦車は単なる鋼鉄の棺桶と化した。

アリストリア大陸の半ばを制圧され、無数の国と都市が炎の中に消えていった。このとき犠牲になった人々の数は2000万人を超えると言われている。

なにせ自動兵器は捕虜を必要としない。人類の殲滅こそが目的だったのだから。

もしこの時、北極から海を渡り『蟲』の大群が大陸に押し寄せてこなければ、人類はアリストリア大陸から駆逐されていたのかもしれない。

人類側にとって幸運だったのは、自動兵器の最優先項目が『蟲』の殲滅だったことだ。

押し寄せる『蟲』の大群に対抗するため、大陸に散らばっていた自動兵器のほとんどが大陸北部に向かった。北部海岸線に配備された防衛部隊だけでは抑え切れない『蟲』の大群。これにより人類が救われたのは皮肉としか言いようが無い。

だがこの時、アリストリア大陸の西隣の大陸で、新たな脅威が発生したことを人々はまだ知らなかった。

オルテアの街の北門に接近している自動兵器。

映し出された自動兵器のサソリの尾が一瞬光り、突如【探索バード】からの映像が途絶えた。ついで北門の辺りで轟音が轟く。クリスがそちらに視線をやると、北門の辺りから黒煙が立ち昇っていた。自動兵器による砲撃だ。

【探索バード】はその余波でやられたのだろう。映像は途切れたままで回復する兆しがない。

「おー。なんかやる気満々？　って私がここにいること知ってるのかな？」

やがて別の【探索バード】からの映像に切り替わった。

自動兵器は破壊した北門の残骸の上を歩いて街に侵入していた。瓦礫を乗り越えると足先のローラーギアを展開。高速で街の大通りを南に向かって走り始めた。つまりはクリスのいる方向へ。

「真っ直ぐこちらに向かってくるって事は、やっぱ私が目的か。さしずめ無断で街に入った侵入者許すまじってところかな。

それならそれで迎え撃っちゃうもんねー」

自身の射線は通り、かつ機体は遮蔽物に隠せる場所に移動し、片膝について射撃体勢を取る。

バックパックに装備した、上下二つ折りしていた魔道砲を展開、フルバレル状態にする。

魔道砲はフルバレル状態で56口径だが、普段から機甲騎兵の身長ほどの砲身長を担いでいてはいろいろ支障がでる。そのため普段は半分ほどの26口径で上下に折畳み、ショートバレルにしていた。

どちらの状態でも発砲に支障はないが、長射程での精密射撃にはフルバレルとしたほうが精度も威力も優る。

二本に分割された砲身が、一本の長砲身と化す。

匠の技法により仕上げられた砲身には1ミクロンの歪みもない。発射体勢を整えるクリス。

装填される弾種はモチロン魔法――ではなく実体弾の徹甲弾。アイエレDに装備した魔道砲は魔法と実体弾の両方射撃可能な併用型だ。

この世界において、銃や砲は『魔法を撃つための道具』だ。AMF状況下での有効性を学び、実体弾を使おうと考える者も出始めているがまだ小数だ。

クリスもその内の一人なのだが、クリスの場合は単に実弾マニアなだけであつた。

「魔法も良いけどせっかくの戦車砲。実戦での初弾はやっぱ実弾撃たなきゃねー。くくくつ。旧ドイツ軍の守護神8・8Cm高射砲を戦車用に転用した56口径8・8Cm砲――をモデルにしたこの魔道砲。

当たると、とおくっても痛いぞう」

右手でシート横に装備された魔道砲用の照準器を取り出し覗き込む。照準器は四角い箱に銃把と引き金を付けたような形で、遠距離での精密射撃時に使用する。

照準レンズを徹甲弾用にセット。大きな三角形とその左右に小さな三角形が三つずつ並ぶ照準マークで狙いをつける。

自動兵器は大通りを真っ直ぐ向かって来ていた。狙われているのを察知したか、機体を左右に振り不規則な回避運動を取り始める。

その時、自動兵器を追跡していた【探索バード】からの映像がすべて途切れた。自動兵器がAMFを展開したのだ。

先行試作機には新型のAMFが搭載されていた。

従来型より遥かに高出力のそれは、距離にして旧型の倍の半径200メートルという広範囲内の魔法を無力化ないし弱体化させる。

AMF範囲内に捉われた【探索バード】は魔力結合を解かれ、霧散して消えたのだった。

原因不明で数羽の【探索バード】の反応が消滅したのを察知したクリスだが、射撃体勢を解かず自動兵器が接近するのをじっと待っていた。

相手は複雑な動きで的を絞らせまいとしている。だが集中してよく見ると、やがて相手の動きが緩慢に感られ、次にどう動くのかがはつきりと「見えた」。

「距離2000・・・1800・・・1500！　喰らえ、イタイ

イタイ砲！
ファイエル撃てー！」

轟音と爆炎を散らし発射された徹甲弾が、大気を引き裂き自動兵器に突き刺さった。機銃が内蔵された左腕と左脚の一本をもぎ取る衝撃で体勢を崩し、自動兵器は速度を落とせぬままスピニングして傍らの建物に頭から突っ込んだ。すでに半壊状態の建物は、大質量の自動兵器の衝突で完全に崩れ落ちる。崩れた瓦礫が自動兵器に降り注ぎ砂塵が舞い上がった。

魔道砲から排出された巨大な消火器のような薬莢が、石畳で舗装された通りの上を甲高い音を立て転がっていく。

「命中！　さすが【精密射撃】スキル10レベル！　予測射撃も完璧っ。続いて第二射っ！　次弾装填、弾種徹甲！
ファイエル撃てー！」

スキルとは異なる力が働いたことに気がつかないクリスは、矢継ぎ早に装填した第二射を発砲。瓦礫の山から抜け出そうとしていた自動兵器に突き刺さった。残っていた右腕が機銃ごと吹き飛び、機体の半ばを埋めていた瓦礫と共にばらばらの破片となって飛び散る。第二射の発射後すぐにクリスは動く。

「チャーンズ、白兵戦で止めだ。無駄に接近して剣で止めをさすのがロボット戦の花っ！（偏見）」

射撃体勢のまま機体各部のスラスターを最大に吹かし、遮蔽物を飛び越えて大通りへ躍り出る。空中で射撃体勢を解き、着地と同時にローラーギアと背面スラスターを全開。怒涛の勢いで自動兵器へと迫った。

石畳の上を爆走しつつ、腰にマウントしてある近接専用のブロードソードを抜く。

自動兵器の主演算機は混乱していた。なぜこのような事態になったか理解できなかった。

原因なら分かっている。街に侵入した機甲騎兵に撃たれたからだ。問題なのは、『なぜ命中したのか』だ。

自身に入力されている回避プログラムは高度で複雑な乱数を用いた最新式だ。機甲騎兵の高速機動にも引けを取らない。回避行動を取る目標に1500メートルの遠距離で命中させるなど不可能なはず。しかし敵機はそれを成し遂げた。

ますます混乱する。

回避プログラムのバグ

N o . 試験前に自己診断プログラムにて確認済み。

高度な射撃支援プログラムの使用

N o . 人類にそのような技術はない。

単なる偶然

N o . 計算的では一千万分の一以下だ。だからこそ偶然なのだが・・・。

原因究明にと様々な可能性を検討するが、そのつど否定する。思考の袋小路を破ったのは敵機接近を告げる副演算装置からの警報だ。件の機甲騎兵は白兵戦用の剣を抜き一直線に突撃して来ていた。主演算装置はさらに混乱した。

なぜ遠距離からの攻撃を継続せず不利な接近戦を挑むのか。A M Fの範囲内に入った機甲騎兵は行動に大きな支障が出る。近接する必要性など無いはずだ。自殺行為である。理解不能だった。

クリスはA M Fの存在を知らない。かつ白兵戦はロボット戦闘の花などと戯けた理由から接近してくるのだが、自動兵器にその理由は分らない。

主演算装置は迎撃命令を出し、左右の四連装ミサイルランチャーを展開、全力射出した。迫り来る八発のミサイルに慌てて回避行動を取る目標。

防御フィールドのある機甲騎兵にはたいしたダメージはないだろうが、これは云わば目くらまし。本命は電磁投射砲の一撃だ。残った脚で機体を起こし万全の発射体勢を整える。

目標までの距離は1000メートルを大きく割り込んでいる。ミサイルはすべて迎撃されたが、愚かな事に目標は射線軸上を直進して来ている。

電磁投射砲の前では機甲騎兵の装甲など紙切れ同然だ。

電磁投射砲から音速を超える砲弾が撃ち放たれた。

迫り来る八本のミサイルに焦るクリス。

慌てて回避行動を取りつつ内蔵の12・5mm魔道機銃で迎撃する。ティエレDに到達する前に全弾撃ち落とせたのは行幸だ。

「ミサイルぶつ放すとはなんと無粋な！ こっちが剣を抜いたら同じく剣で応えるってのが漢の戦いってもんだろっが！」

理不尽な怒りを燃やすクリス。

最後の一発は機銃では間に合わず剣を投げて撃ち落した。失った剣の代わりに仕方なく予備の騎兵用小太刀を引き抜く。

おのれ弁償させてやる！、と爆炎の向こうの自動兵器を映像盤越しに睨む。一瞬晴れた爆炎の隙間から自動兵器が垣間見えた。怪しく光るサソリの尾をこちらを向けている。

脳裏で【危険感知】スキルがけたましく警報を鳴らした。

「やべっ！」

自動で【緊急回避】スキルが発動し、機体を傾け回避を試みる。サソリの尾が閃光を輝かせた。

「間に合わない！」

【直感】がそう告げていた。

【回避】【高速回避】【機動回避】【緊急回避】、どの回避スキルも間に合わない。

いずれの回避を使おうと、クリスにはすべての結果が「見えて」いた。

防御系スキルも同様だ。

クリスの感覚が、何者かの支援を受けて研ぎ澄まされる。

途端、クリスには自分の外の時間が緩慢と流れはじめたのを感じた。すべてのものがスローモーションとなりゆっくりと流れて行くのが「見えた」。

迫り来る破壊が目前に迫る。

必殺の砲弾をかわす術はない。防御スキルも耐えられない。回避も防御も無理ならば――

「【魔断閃】！」

刃一閃。

縦に分断された砲弾が、ティエレDの両脇を通り過ぎ背後のビルを撃ち抜く。大爆発が起きた。

前衛系の職業は、90レベルから奥義クラスと呼ばれる強力なスキルが使えるようになる。

【魔断閃】は【剣士】99レベルの奥義だ。

このスキルで斬れない物はない。巨石であろうとダイヤであろうと、たとえ迫り来る砲弾であろうと。

攻撃と防御の特性を併せ持つ【剣士】最強の奥義なのだ。

技の使用時に刀属性を持つ白兵武器を使うと、成功度と効果が二割増しになる。失くしたブロードソードの代わりに小太刀を抜いたのは正解だった。

「某明治サムライ漫画で、小太刀は盾として使える刀ってあったけどホントだな！」

壮絶な勘違いなのだが結果よければ全てよし。

なお、これ以後クリスは生身でも小太刀を愛用するようになるのだが余談である。

それはさておき、クリスは怒り心頭だった。

「あくまで漢の勝負に応じないってんならこちらにも考えがある！無理矢理にでも応じさせたるわぁ！」

アクセルペダルをめいいつぱい踏み込み、ティエレDに最大加速を行わせる。機体背面の四つの大型スラスタが最大級の推進炎を吐き出した。

小太刀の刃を上にも腰だめに構え、突貫。所謂ヤクザの「タマあ殺つたるわ！」アタックを敢行した。

アークドライブはパイロットの感情でその最大出力が変化する。クリスの感情の爆発を受けて限界以上の出力をたたき出した。推進炎が遙か後方まで尾を引き加速。時速400Kmを突破した。ヤクザアタックのポーズのまま自動兵器へと猛チャージする。

「往生せいやーーーーー！！・・・って、アレ？」

急激にアークドライブの出力が低下した。自動兵器のAMF領域に踏み込んだためだ。

背面スラスターの噴煙が、「パスン」という情けない音と共に消え去り加速の終了を告げる。

ドライブの出力が低下しようがスラスターの噴煙が止まろうが、加速で生じたティエLEDの運動エネルギーは止まらない。

さしものレッド・チャペルも、急激に低下した出力をパイロットの精神力で補うには僅かの間を必要とした。スラスターの再点火も間に合わない。

「あら？」

結果、ほとんど減速することも出来ずそのまま自動兵器へと向かっていく。すでに目と鼻の先だ。

途中、へたに脚部に力を入れたものだから、路面の突起につま先を引っ掛け頭から派手に転倒した。だがしかし、その程度で停止できるほど生易しい慣性ではなかった。

派手に転がりながらも止まる気配はない。

いきなりコケたお陰で電磁投射砲の第二射を回避できたのだが、運が良かったのか悪かったのか。

「

!!!!!!??」

操縦席の中で声にならない悲鳴を上げるクリス。

立ち並ぶピンへと向かうボーリングの玉よろしく、自ら生じさせた運動エネルギーを保持したまま自動兵器へと衝突する羽目になった。

それはもう見事なくらいのストライク。

砲弾を超える鉄塊の直撃を受けた自走兵器は、爆発すら出来ず四散した。様々な部品をぶちまけあるいは押し潰されkg幾らのスクラップへと変わる。

クリスにとって幸運だったのは、ティエレDがまさしく重装甲だったことだろう。

並みの機甲騎兵であれば諸共に大破していたのは確実だ。たとえば操縦席の中がミキサー状態となったとしても。

かくして、クリス初の実戦は、実に締まらない幕引きと相成ったのであった。

夜も更けた中、半壊したティエレDの傍らで、戦利品漁りという名のスクラップ回収をするクリスの姿があった。

えぐえぐと滂沱の涙を流しながら。

なお、ティエレDの修理には丸二日を要したという。

第04話 騎士

太陽は天頂でその輝きを強め、容赦のない陽光を大地に降り注いでいる。

赤茶けた大地を焦がす熱が陽炎となつて立ち昇り、荒野を行く人の目を惑わせる。

不毛ともいえる大地。一年の降水量を雨季のみに頼る大地に、命の恵みは少ない。その痩せた大地の赤茶けた砂塵を巻き上げ、道なき道を行く一両の戦車があつた。

戦車は後方に荷車のようなものを牽引している。

朝から荒野を走り通し、ようやくクリスの視界に僅かに茂る緑がちらほらと映りはじめた。周囲に本格的な緑が映えるのは、もう少し南に下った先だろう。

天には雲ひとつない青々とした空が広がっている。が、クリスの心の中はもやもやとした雲で覆われていた。天使のような整った顔に如実に内面の不機嫌さが表れ、斜を落としている。

原因は言わずもがな、オルテアの街での戦闘だ。

アークトドライブの原因不明の出力低下。それに伴い加速状態での自動兵器への衝突。

大事な大事なティエレDを中破させてしまった。綺麗に仕上げた装甲版が凹み気分も凹む。まともにぶつかった左腕など肩の付け根からもげてしまい、泣く泣く新しい腕と交換した。

敵の攻撃での破損ならばまだ許せた。未熟な自分の腕前に怒りをぶつければいい。

だがしかし、あの戦闘での最後の有様はいわば事故。

クライマックス直前、クリスは自動兵器を華麗に仕留め燃え盛る炎をバツクに風にたなびく髪を掻き揚げつつニヒルな笑みを浮かべるといふ自己賛美のシーンを脳裏に思い描いたのだが、現実には操縦席の中で目を回し気絶していたという始末。

それでも原因が判れば少しはマシだったのだろうが、AMFの存在を知らないクリスには理由が判別つかない。

ティエレの修理に関しても普段なら楽しいはずの作業だが、当然のごとく少しも楽しめなかった。修理にかけた二日間、ずっと不機嫌オーラ全開で過ごしたのである。

こんな事ではいけないと、ちよつとした気分転換を試みたのだが効果は薄かった。

クリスがその一団を発見したのは、オルテアの街を後にして半日後のことだ。

照りつける陽の光に、不機嫌オーラ七割り増しのクリスはストレス発散先を物色していたのだが、そうそう見当たるはずもない。より一層イライラが募る。

そろそろ当たりかまわず攻撃魔法でも乱打しようかと考え始めた矢先、視界の彼方で自動兵器に追われている一行が目についた。

手前には、その一行を目指してるらしい小山のような巨体の自動兵器もいた。

クリスの顔に黒い笑みが浮かぶ。

ひよつとしたら自動兵器しか目に入らなかったのかもしれない。牽引するキャリーを切り離し、クリスは高らかに叫ぶ。

「突貫！ P a n z e r V o r !

「くそっ！ 何故こうもうじゃうじゃと集まってきやがるんだ、こいつらは！」

「隊長、まずいです！ このままでは囲まれます！」
「ちいっ！ 奥に入り込み過ぎたか！？」

前方から押し寄せる自動兵器の群れに、無線越しに伝える緊迫した部下の声。

目下の敵を切り伏せ、自身の判断ミスに思わず舌打ちするアーサー。だが、状況にそぐわぬ落ち着いた声がその言葉を否定する。

「そんな筈はないよ。オルテアまで200Kmは離れている。冒険者達から集めた情報では、奴らの重要警戒ラインまでまだ先のはずだ」

「じゃあ、なぜ機械どもはこんなに集まっているんです？ オルガ導師のご見解は？」

「それは判からないね。残念だが情報不足だ。おそらく彼らにとって異常事態でも起きたんじゃないかな」

オルガと呼ばれた男の応えは解をなすものではなかったが、実は正鵠を射ている。もっとも彼らに気づく術はないのだが。自動兵器の目的は、連絡を絶った先行試作機の搜索であった。

「要は、原因不明というわけか」

「その通りだよ、アーサー。もっとも原因が分かったところで目の前の敵が消えてくれるわけじゃない。今は原因究明より生き延びる方が先決だね」

「ああ、分かっている。ハリソン、ランバート！ 囲みの薄いとこ

るを突破する、ついて来い！ ランスも遅れるなよ！」
「了解！」 「はいよ」

アーサーが主君から密命を帯び、自治港湾都市ラスカーシャを訪れたのは七日前。

街での準備と情報収集に二日をかけ、二人の部下と護衛対象であり友人でもあるランスロットと共に自動兵器狩りを続けていた。

ランスロットの開発したAMFの対抗装置。その実証実験のためだ。

実験は大成功と断言している。

展開されたAMF内では機甲騎兵はその行動に大きな影響を受ける。アークトドライブの出力低下。魔動機関の不調。魔術の使用阻害。機甲騎兵や戦車、その他の魔動機械は本来の力の半分も発揮できない。

AMFの存在は長年推察されてきたが、その対抗策を探るには世界はあまりに混乱していた。

自動兵器に滅ぼされた国。焼き払われた街。生まれた土地を捨て、安全を求めて流入する難民。失った多くの人命。多くの知識と技術が失われた。

魔法を用いない実弾兵器の開発に成功しなければ、人類は自動兵器に抗う術さえなかっただろう。それでも大陸の半ば以上の土地を奪われてしまったのだが。

『蟲』の大侵攻で自動兵器の戦力の大半が北に向けられている現在。その機会を生かしきれなければ人類は滅んでしまうのかもしれない。例えばそれが、人類の宿敵たる『蟲』により得られた機会だったとしても。

ランスロット・オルガが苦心のすえ完成させたAMF対抗装置は

完全に機能した。

騎兵は魔動兵装こそ使えないものの、AMFの影響を受けずよく動いた。なによりローラーギアが機能し、高速機動が出来るのがありがたかった。倒すにしても逃げるにしても。

人類がようやく掴んだ反撃の芽だ。失う訳には行かない。アーサーは己の心に喝を入れる。

一団となって駆る機甲騎兵。

進路を塞ごうと前に出てきた蜘蛛型の自動兵器を一撃で切り伏せ、そのまま駆け抜ける。一行は囲みを突破するとローラーギアを全開にして自動兵器を引き剥がしにかかる。

「それにしても、オルガ導師の開発した魔動機械はたいしたものですね。AMF範囲内でも普段通りに騎兵を動かせるとは」

「いやまったく。こいつがあれば戦況は変わりますよ。機械どもを駆逐できるかもしれない」

逼迫した状況であるにもかかわらず、どこか気楽な様子の部下達に苦笑するアーサー。

しかし隊長としてはクギを刺さなければならない。

「お前たち、安全圏に逃れきるまで気を抜くなよ？」

「了解です、隊長」

「ほめてくれるのは嬉しいんだけど、まだまだ未完成なんだよね、アレ」

「げ。マジスカ」

いきなり動揺するハリソン。

だが続くランスロットの説明にほっと息を吐いた。

「うん。まだ出力が弱くてせいぜい騎兵を覆うくらいでイッパイな

んだ。もつと広範囲に広げることが出来れば魔法を併用する戦いが出来るんだけどねえ。

連続使用も八時間が限界。出来れば一日は持つようにしたいね。ああ、念のために言っておくけど、今朝方新品と交換しておいたから今日はまだ持つよ」

「よかった。一時はどうなるかと」

「騎兵の動きが阻害されないだけでも助かる。私は騎士だからな。魔法より剣を振るうほうが性に合っている」

「魔動士官がそんなこと言うかね。ってか君、魔動術師としても一流だろう？ たしか古式魔術の心得もあつたよね」

「だから」性に合っている」と言っている。必要なら魔法でもなんでも使うさ」

背後から追いつがる蜘蛛を振り向きざまに大口径銃で撃ち抜く。急所に命中したか機能を停止し脱落したあおりで衝突した数機の蜘蛛を巻き込み爆発する。

アーサーは硝煙が立ち昇る銃を捨てた。弾切れだ。

「たとえ実弾の射撃武器だとしてもな」

「実弾武器は嫌いかい？」

「性に合わなくてね。弾が尽きれば使えなくなるなど不合理極まりない。弾薬も荷物になるしな」

「君ほどの騎士なら武法を使ったほうが早いのだろうけど、自重してくれよ？ ラスカーシャには冒険者という触れ込み出来ているんだ。自治都市政府や周辺国と余計な波風はごめんだよ」

「了解だ、雇用主。報酬は弾んでくれ」

一行の役どころはランスロットが金持ちの若旦那、アーサーとハリソン、ランバートが護衛に雇われた冒険者というものだ。

装甲騎兵にもそれっぽい偽装を施している。

「精神的なものでよければ幾らでも。実収入は上と直接掛け合ってくれよ」

「あまり期待できそうに無いな。――包囲は突破した。全力で逃げるぞ！」

「了解」

「にしても何故実験を秘密にするんです？　AMF対抗装置の開発にしたって他国も開発中でしょう？　よそと協力してやればもっと早く完成にこぎつけるでしょうに」

ローラーギアの全速力で走破しつつ、ハリソンがぼやいた。

当然だ。自動兵器との戦いは、人類の存亡をかけた戦いなのだから。だが、政治というやつは様々な思惑が入り乱れる複雑怪奇な世界だ。

アーサーがぼやく。

「自動兵器駆逐後を見越した政治的駆け引きというやつだ。他国を出し抜いて主導権を握りたいのだろう、宰相殿はな。ランスが我々と同行しているのもそれが理由だ。本来なら、安全な場所の研究に従事してもらいたいのだが。国元に残したままだと、宰相殿や他国の間に狙われる可能性があるからと陛下も危惧しておられた」

「ったく、あのクソジジイが！」

ランバートが吐き捨てるように言った。

「そう言っただけでやるな。宰相殿も、私心はあれど国の為に動いているのだ。あれでもな。それに陛下としてその思惑はある。聖人君子では勤まらないのが為政者というものだろう。信念に従い、剣を振るえば良い我々とは違うさ」

「隊長！　八時の方向に新たな敵影！　数四！　四時の方向にも敵

です！」

突如、ハリソンが警戒の声を上げた。それはやがて悲鳴に変わっていく。

全員の視線がハリソンのさす方向に向けられる。

「そちらの数は一機ですが・・・あ、あれは・・・あれは、ヘカトンケイルです！」

「なんだと！」

「おいおい、ヘカトンケイルってまさか!？」

部隊に衝撃が走った。さすがのアーサーも背に冷や汗が流れる。これまでのランスロットの余裕ある雰囲気も吹き飛ぶ。

ヘカトンケイルは全長20メートル、高さ8メートルにも及ぶ大型の自動兵器だ。

巨大な無限軌道の上にのせられた巨体。その本体の左右側面に巨大なコンテナを前後に二列装着している。そこに無数の子機を格納している。

直径五十センチほどの小型自動兵器は強力な爆弾をその腹に抱え、高速で目標に接近、体当たりして自爆する。その破壊力は機甲騎兵など一撃で大破せしめるほどだ。

親機であるヘカトンケイルはコンテナに数百の子機を格納している。嘘か本当か不明だが、本体内部で小型自動兵器を生産できるという話まである。親機本体の戦闘力も桁違いに高く、本来は都市殲滅戦用の大型自動兵器なのだ。

間違ってもこのような場所にいていい相手ではない。

最悪の相手だった。

一番まずいのは、ヘカトンケイル子機の移動速度は機甲騎兵を軽く上回ることだろう。つまり、確実に追いつかれる。

いかにAMF対抗装置を搭載した騎兵とはいえ、僅か四機では太刀打ちできない絶望的な相手だった。

（わが身を楯にして如何ほどの時間が稼げるか・・・だが、なんとかしてでもランスは守らなくては！）

機体を反転させたアーサーはヘカトンケイルへとその機体を向けた。

「これは命令だ！ 私が囫となって奴を引きつける。その間になんとしてでも逃げ延びろ！ お前たちはその身を楯にしてもランスを守れ！」

「た、隊長！？」

「アーサー、無茶だ！ あれの相手は君一人では・・・」

「オルガ道師、お早く！ ここで立ち止まっては隊長の死が無意味になってしまいます！ ハリソン、お前も早く・・・って、おい！」

アーサーに続き、ハリソンまできびすを返しヘカトンケイルに向かう様子を見て驚愕するランバート。

「ハリソン！」

「導師のことは頼む！ いくら隊長でも無数の子機まで居たんじゃ一人じゃ無理だ。せめて子機だけでも俺が引き受ければあるいはっ！」

「そりゃ俺の役目だろう！ お前にはエミリーが・・・」

「貧乏くじ引かせてすまん。エミリーにはお前から謝っといってくれ」「ば、馬鹿野郎がつ！！」

ヘカトンケイルは機体左右のコンテナを開き、子機を無数に吐き出した。その数は優に百を超えている。

地面に転げ落ちた悪魔の実はやがて静止し、球体中央の単眼を怪しく光らせると空中に浮かび上がった。本体からの指令を受け、その単眼で愚かにも向かってくる敵機を見据える。

黒い悪魔の群れが哀れな獲物に向けて解き放たれようとした矢先、ヘカトンケイルとその子機たちのはるか上空に巨大な魔法陣が出現した。

「魔法陣!？」

突如として上空に出現した巨大な魔法陣。

脳裏に危険なものを感じ、とっさに操縦桿を倒して進路を変える。後から続いたハリソンもアーサーに習って進路変更し、機体を側に寄せて停止する。

「隊長!？」

「ハリソン!？ お前何故ついてきた！ ランスを守れと命令しただろう!」

「すみません、隊長。楯は二枚あったほうがいいかと思ひまして。それにしても、ありやなんですか？ 自動兵器のそばでは魔法は使えないんじゃない?」

「魔法陣はAMF領域外にあるんだろう。それよりここを離れてランバートと合流するぞ。ここは危険だ!」

魔法陣の輝きが増していくことに身の危険を感じ、急いで退避を始める二機。

ヘカトンケイルの周囲に散らばっていた子機達は、突如として発生した魔法陣に戸惑っているのか身体を左右に振って空中に停止したままだ。

魔法陣はさらに輝きを増すとゆっくりと時計回りに回転を始めた。するとすぐ下に小さな魔法陣が展開される。小さな魔法陣は上とは

逆に反時計回りに回転を始め、やがて小さな雷を伴い魔法陣全体が雷を帯びていった。

突如、世界を光が覆った。続く轟音に大気が震え、周囲を打ちのめす。

魔法陣より解き放たれた無数の雷槍が豪雨のごとく直下の自動兵器に降り注ぐ。逃れようとするヘカトンケイルの子機らが雷の槍に貫かれ、腹の爆弾を誘爆させられひとつ残らず爆散した。

轟音を轟かせ降り注ぐ雷の雨はいつまでもやまず、ヘカトンケイル本体にも容赦なく襲い掛かった。雷にさらされ装甲板がえぐり取られ弾け飛ぶ。

雷の槍はやがて一本の極大の剣に収束されヘカトンケイルに突き立てられる。潜り込んだ雷が内部で荒れ狂いずたずたに引き裂き焼き尽し大爆発を起こした。

雷の被害は自動兵器のみに収まらない。周囲の大地をもえぐり、自動兵器を含めてすべての物を吹き飛ばした。

それはまさに天の断罪。

矮小なものなど意にも介さず、抗うことさえ許さず、神成りとなつて撃ち滅ぼす破壊の力。

突然の出来事に、呆然となつてヘカトンケイルがいた場所を眺めるだけのアーサーとハリソン。

そこにはもはや何もない。大きくえぐられた大地の跡が、目の前で起きた出来事が夢ではなかったことを告げているだけだ。

「な、なんだつたんです、今の」

「・・・判らん」

『ランバート！！』

無線機から聞こえてきたランスロットの動揺した声に、二人は現実引き戻された。

慌てて振り返ると、ランスロットを庇ったランバートの機甲騎兵が蜘蛛型自動兵器の爪に貫かれていた。下段から切り上げた剣で自らを貫く爪を腕ごと切り落とし、返す刀で本体を叩き斬る。

破壊された蜘蛛と同時に地面に崩れ落ちるランバートの機体。

「ランバート！」

ローラーギアを全開にして二人の元に急ぎ戻ろうとするアーサー。自らを楯にするべくヘカトンケイルへと向かっていたのが仇になった。倒れたランバートとランスロットを取り囲む自動兵器の群れが輪を狭め間近に迫っていた。

ランスロットは機甲騎兵に乗ってはいるが、本来は学者であり戦う人間ではない。周囲を取り囲む自動兵器に抗う術は持ち合わせていなかった。

迫り来る自動兵器の群れに押されるように後ずさるランスロット。しかし、背後に回りこんだ別の自動兵器が退路を断つ。もはやどこにも逃げ場は無かった。

「ランス！　どうにか逃げてくれ！」

『僕には無理だよアーサー。どこにも逃げ場はないみだいだ』

どこか達観したランスロットの声が無線機から聞こえる。

ゆっくりと近づいた蜘蛛型自動兵器が、ランスロットの機体を貫かんと鋭い爪を持つ前足を振り上げる。

『…ごめん、アーサー』

「ランスロット!」

アーサーの悲鳴に似た声が親友の名を叫ぶ。

いままさに振り下ろされんとしたその時、大気を引き裂く音と共にランスロットを貫こうとした自動兵器の前半分が吹き飛んだ。

『…あれ?』

「な、なんだ!？」

立て続く理解不能な出来事に、さすがのアーサーも思考が停止する。

「隊長! 後方から見慣れない騎兵が信じられない速さで向かって来ます!」

「なに!？」

見ると、確かに見慣れない濃緑色の機甲騎兵が猛スピードで近づいてくる。それも尋常ではない速さで。

ローラーギアとか高速機動とかいったレベルを遥かに超えていた。しかも、その機甲騎兵は、馬鹿げたことに自身の身長と同じくらいの砲身長の戦車砲を背負っていた。両手には巨大なハルバートを抱えている。

背中 of 戦車砲が火を吹いた。

思わず身を強張らせたアーサーとハリソンだったが、もちろん戦車砲の狙いは二人ではない。ランスロットの背後から忍び寄る自動兵器に穴が開き、ついで爆発が起きる。

『もげらー！！？』

間近で起きた爆風の煽りを受け、もんどりうって倒れるランスロットの機体。

アーサーは、ようやく事態を把握した。

「さっきのあれは、アイツの仕業か！」

アクセルペダルをべた踏みしえローラーギアを全開。二人の元に戻るべく大地を駆ける。

「ハリソン、今のうちに二人の元に戻るぞ！ 急げ！」

「り、了解！」

「間に合え！」

急ぐアーサーの視界の中で、ランスロットの周りに詰め寄った自動機械が一機二機と爆散していく。

後方の機甲騎兵の砲撃だろう。高速で移動しながら確実に敵を仕留めていく腕前に舌を巻くアーサー。

瞬く間に敵の数が半減する。一発のミスもない。恐ろしいほどの腕前だった。

「た、隊長！？」

背後からハリソンの驚く声が聞こえた。「どうした」と声をかけようとした時に、傍らを緑の影が追い抜いて行った。あっという間に距離を離される。

件の機甲騎兵だった。

「速い！」

背後から見れば速さの正体がわかる。騎兵背面に取り付けたジャンプ用の大型スラスターだ。それも四器もある。

ジャンプ用のスラスターは、本来は段差や障害物を飛び越える為に一時的に使用するものだ。そのため脚部や腰に設置するのが常識となっている。件の機甲騎兵は、あきれたことにそれを推進力として利用するために背中に配置していた。それも加速を得るために常時噴射という常識外れの方法で。

だが、その常識外れのお陰で瞬く間に距離をつめ、ランスロット達の元に到達する。そしてさらに常識外れの行動に出た。

驚くべきことに、濃緑色の機甲騎兵は減速どころかさらに加速して自動兵器の群れに突撃した。騎兵の体当たりを受けた敵機はその場で粉碎され、また別の敵機は衝撃で跳ね飛ばされる。かなりの距離を飛んだあと大地に叩きつけられ爆発した。

普通の機甲騎兵なら粉碎された自動兵器と同様の運命を辿るのだろう。しかし、件の騎兵はとてつもない重装甲でろくに損傷は見当たらぬ。驚くべき頑強さだった。

「なんて奴だ・・・」

もはや驚きを通り越して呆れるしかないアーサー。

自動兵器を跳ね飛ばし通り過ぎた機甲騎兵は、すぐさま機体の向きを変え、それまで推進力としていたスラスターを減速用として使う。機体を左に横滑りさせつつ戦車砲を発砲。残った自動兵器の内の一機を鉄くずに変えた。

残りの自動兵器はすでに二機にまで減っていた。

距離をつめた濃緑色の騎兵が手にしていた巨大なハルバートを振りかぶり一閃。敵を両断する。

最後の一機が猛然と攻め寄ってきた。お返しとばかりに頭から騎

兵に突っ込む。慌てることなく左肩の巨大な楯で相手を受け止めると、ハルバートを手放した右腕を差し出した。

戦車砲に匹敵する轟音と共に鋼の杭が打ち出され、最後の自動兵器を撃ち貫く。

主演算装置を貫かれた自動兵器は一度ビクツと震えると力なく崩れ落ちる。排出されたパイルバンカー用の薬莢が大地に落ちた。

アーサーとハリソンが二人の元に戻れたのは、結局のところすべてが終わってからだった。情けないことに、まるで出番が無かった。件の機甲騎兵は、倒れた騎兵から這い出てきたランスロットとランバートを警護しつつ、撃ち漏らしの敵がいなか周囲を警戒している。

「ランス、ランバート！ 無事か！」

「やあ、アーサー。ランバートが庇ってくれたので僕に怪我はないよ。まあ、倒れたときに頭打っちゃったけど。ランバートも怪我はしてるが無事だ。それと、彼のお陰で二人とも命拾いできたよ」

傍らで警戒を続ける濃緑色の機甲騎兵を見上げ、ランスロットは笑顔を見せた。ランバートも腕に怪我はしているが、命に別状はなさそう。無事なほうの手を上げ、笑顔でアーサーに無事を伝えるランバート。

アーサーはほっと安堵の息を吐く。

二人の傍らで駐機状態を取り、騎兵から降りるとハリソンにも降りるよう伝える。敵意が無いことを示す為に両手を広げて二人を、おそらくは自分達をも救ってくれた機甲騎兵に歩み寄る。

「君の助力で大事な友と部下の命を拾う事ができた。感謝の意を送ろう。改めて礼を述べたいのだが、降りて来てはもらえないだろうか？」

「・・・落し物を取りに行ってくる」

それだけを告げ、背を向けると走り去る機甲騎兵。

驚くべきことに、騎兵から聞こえてきたのは少女の声だった。それもまだ幼い少女の声だ。走り去る騎兵の背を呆然と見送るアーサー。

「驚いたね。女の子の声だったよ。それもなんだかずいぶん若い感じがしたな。十代かな？」

「私も驚いた。あれほど正確無比な砲撃をおこなう人物が年若い少女とは」

アーサーに歩み寄ったランスロットが感想を述べる。アーサーにしても同意だ。

「それにしても見事な騎兵だ。あれだけの重装甲であそこまでバランスよく仕上げるとは」

「そうだね。普通あそこまで装甲を厚くすると、どうしても取り回しのバランスが崩れるものだけど。よほどしっかり重心設計しているんだろうね。それにあの機動、素晴らしいの一言だよ。ジャンプ用のスラスターを推進力として使うとはね。あの発想は無かったよ」「私のデイスターと同じ物を組み込めないか？」

「正直難しいね。スラスターだけならともかく、あの装甲騎兵のように推進力として使うとなるとアーケドライブの出力が足りないよ。あの騎兵はどんなアーケドライブを使っているんだろう。まさかアーケドライブまでオリジナルじゃないだろうね？」

「さすがに其れはなかつと、思いたいがな。万が一そうであるなら、その技術、他国に渡したくは無いな」

「――物騒なこと考えなくてくれよ？　なにせ命の恩人なんだからね」

「友と部下を救ってくれた恩人だ。恩義を仇で返すがごとき無粋なまねはしないさ。第一、ヘカトンケイルを魔術で屠るほどの人物だ。私程度でどうにかできるとは思えないな」

「あの大規模魔術は彼女が？」

「それ以外考えられまい？　まったく、どこまでも興味が尽きない少女だ」

背を向けて遠ざかる騎兵を興味深げに眺め、アーサーは独り言ちた。

第04話 騎士（後書き）

今後の更新は週一になるかと。

H23/10/04 誤字修正。

第05話 魔法騎士へミラクルナイトへ変身セットと淑女の嗜み

「うーん。どうすつかね」

クリスは迷っていた。と、言うよりヘタレていた。

当初想定していた事態とは異なる展開になりそうだからだ。

「助けたことを恩に着せて、この世界のこととか聞き出したかったんだけど……。あの金髪のイケメンあんちゃん、なんか鋭そうだしなあ。下手すると、こっちのことも根掘り葉掘り聞かれそうだし。うーんうーん」

ティエレDをてれてれ転がしながら対応を考えるクリス。

金髪のイケメンあんちゃんとはアーサーのことだ。行きがかり上、助けてしまった妙な一行。冒険者を装っているがどうも怪しい。さりとしてようやく出会えた人である。

廃墟になったオルテアの街。人を襲う自動兵器などなど。聞いた事は山ほどあるクリス。

「ふふふ、あたし命の恩人ですよ？ いえいえ、謝礼など無用ですよ？ ふふふ」とか言って聞き出そうと思っていたのだが、金髪イケメンあんちゃんことアーサーには額面通りには通じないだろうという確信がクリスにはあった。

【直感】もそう告げている。

質問には素直に応じてくれるだろう。問題は、クリスの事情も同時に聞かれるということだ。

まさか、「オンラインゲームをしてて、気がついたらゲーム世界

に入っていました。てへ」とは言えない。信じてはくれないだろうし、逆に信じられたらもつと厄介だ。

質問の内容が内容だけに、当然のことながら何故それを知らないのかの疑問が沸くだろう。

「いつそ、知らない理由も知らない。気がつけば荒野の真ん中に居ただけ押し通すか？　だって本当のことだし、嘘は言っていないよね。そうと決まればそれっぽい演出もしておいたほうがいいか。一般職業でそれらしい職業を選んでセットを組みなおしてつと・・・」

とりあえず方針を決め、一般職業から役に立ちそうな職業をピックアップする。

「こういう時は、ミステリアスな雰囲気をかもし出して相手を吞でしまうに限るな。それにしても、全職業コンプリートしておいたのがこんな所で役立つなんて、人生何が起きるか分からないねー」

『パンツァー・リート』には、冒険者職業・一般職業あわせて三百以上の職業がある。

狩りや戦争を楽しむなら冒険者職業が重要となるが、武器・防具を作成する【鍛冶屋】やアイテム購入・販売に有利な【商人】など、一般職業にも楽しめる職業が豊富だ。なかには何故こんなのがと疑問を感じずにはいられない職業もあつたりするが。

クリスは桐生徹時代、コレクター根性を発揮して全職業100レベルという偉業を達成していた。

職業のスキルは職業使用設定欄にセットしていなければ使用できない。職業の組み換えはいつでも出来るが、使用設定欄には定数がある。中には設定欄にセットするだけで発動するアクティブスキルもあるので、どの職業をセットするかはよく考えなければならない。

「とりあえず【異邦人】と【占い師】かなあ。あと幾つか不思議系職業入れて……。【貴婦人】は対人関係強いし礼儀作法とかもあるし、失礼のないようにセットから外さないほうがいいかな」

荷車を引いて四人組の元に戻るまでの間、あーでもないこーでもないと考えを巡らせるクリスであった。

後ろ手にキャリーを引いて戻ってきた濃緑色の重装甲機甲騎兵が、圧倒的な存在感を主張しつつ目前で駐機体勢を取る。操縦室の展望塔ハッチが開き、中からやたらと小柄な騎手が姿を現した。

軽い身のこなしで降りてきた騎手であるクリスを見て目が点になる四人。アーサーはすぐに表情を戻したが、残りの三人はかばんと顎を開いたままだ。

呆然とした三人に視線をやり小首をかしげるクリス。

アーサーに歩み寄ると、笑顔を見せて声をかけた。

「みなさん、ご無事でなによりです。始めまして。クリステイナと申します」

「あ、ああ。私の名はアーサーだ。友と部下の命を救ってくれたこと、改めて礼を述べたい」

なんでもない風を装ってはいるが、アーサーは戸惑っていた。後の三人は完全に固まっている。

自分たちを救ってくれた凄腕の騎手は年端もいかぬ少女であろう

ことは声で察していたが、目の前の少女はどう見ても13〜14歳くらいにしか見えない。

思っていた以上に幼い。そして美しかった。

天使のように整った容姿。左眼を眼帯で覆っているが、右眼からは透通るような翠の瞳が覗いている。銀細工のごとく細く美しい銀髪は頭の左右でリボンでまとめられていた。華奢で細い体。身長は140cmくらいだろう。アーサーの胸くらいしかない。

目の前の少女が、神業のような砲撃を連続して決めた騎手とはとても思えなかった。そして、おそらくはヘカトンケイルを沈めた大規模魔術の使い手だとは。

やたらと啞然としている四人の様子に内心苦笑するクリス。

（まあ、こんなちみつこい女の子がパイロットだったなんて、普通戸惑うよね）

実は違う。

たしかにアーサー達は想像以上に幼い姿のクリスに戸惑いはしたが、それ以上にもっと驚いていることがあるのだ。

それはクリスが身に纏う衣装。

羽織ったマントは良いにしても、身体をびっちりと覆う薄手のスーツ。腰を申し訳程度に覆うピンク掛かったスカート。そこから伸びる細い足は、絶対領域を経てニーソックスに覆われている。

これこそが、数ある衣装アイテムの中でも異色中の異色と言われる魔法騎士変身セットであり、その中でも人気度抜群の某魔砲少女雷系金髪ツインテール小娘バージョンであった。

ミラクルナイト
魔法騎士変身セットの中でも玉数の少ないレアアイテムである。

この衣装、クリスが着用するとトンデモナイ事態が発生する。

ただでさえ身体をぴっちりと覆う衣装。さらに胸の上下を通る細い二本のベルト。そして、クリスは低い身長とは逆に非常に胸が豊かだ。幼い容姿にかかわらず、胸のサイズは成人女性を超える。胸だけでなく身長を除けばボンキュッボンの大人顔負けのボディなのだった。

それが何を意味するのか？

胸の形がはつきりと出る衣装の上に、さらにそれを強調するかのごとく二本の細いベルトが上下に通っているのだ。まるで挟んだモノを搾り出しているかのように。

これがどれほど危険な爆弾か、簡単にご理解頂けるだろう。

クリスの中の人、桐生徹はオタクである。ただし自ら行動するオタクではなく見て楽しむオタクだ。

同人即売会にも同人誌購入やイベントの見学が目的で、それらに参加側から出た事はない。レイヤーではない徹がその手の衣装を身に着けることは無かった。

そのクリスが魔法騎士変身セットに腕を通したのは、オルテアの街でやらかした大ボカの気分転換だ。

誰にでも魔が差すというのはあるよね？変身するとき、誰にとでもなく言い訳をして試してみたのだった。

ゲーム上では何度も変身させていたのだが、リアルで身に着けるとどうだろうという好奇心もあった。

最初は「おお、似合うじゃない！」とか喜んでいたが、すぐにダウナーな気分がぶり返し、黙々とティエレDの修理に戻った。着替えることも忘れて。

胸の爆弾をさらけ出したまま天使の微笑で挨拶をするクリスに、アーサー達はいかほど戸惑っただろうか。まず幼さに驚き、ついで

少女の美しさに驚き、そして最後に胸の爆弾に驚く。

互いに名乗り挨拶を交わしたのち、なにを話せばいいか分からなくなっただとしても、四人を責めるのは筋違いというものだろう。

やたらと強調される胸元に視線が集まったとしても、それは仕方の無いことではないだろうか。

四人の態度に違和感を覚えたクリスは、やがて彼らの視線が自分の一点を指しているのに気が付く。その視線を追い、自らの視線を下に落とした。

そこには、薄い衣装の内側からはち切れんばかりに布地を押し上げる双丘の膨らみがあった。

此処にきて始めて、クリスは自分の姿態が如何ほどのものか理解したのである。男たちの視線の意味も。

「きゃあああああああああー！！！！」

羽織ったマントを身体の前で合わせ、クリスはその場でしゃがみ込む。うなじまで真っ赤であった。

これに慌てたのはアーサー達である。

悪意や作為を見破ることには長けているアーサーだが、そんなものは欠片もない天然自然には不慣れであった。

「え？ あ、ちよつ。は？ なんで！？」

「これこれ、君たち。そんなにじっくり見ては失礼だよ」

「どどど導師だってしっかり見てたじゃないですか！」

「えみりーよりでえ・・・」

アーサー達にぜんぜんまったく非はない。だがしかし、目の前で幼い少女が男たちの視線から身体を隠すようにマントを寄り合わせ真っ赤になってしゃがみ込んでしまうと、まるで自分たちが非道な

行為をしてしまったかのような錯覚に陥ってしまった。

少女が目じりに涙まで浮かべていればなおさらだ。

クリス自身もパニックに陥っていた。

（ハスカシィーで、なんで恥ずかしい？ 私の中身は男だし、別に俺が慌てることは何も……。見たきや別に見ればいいし……。みみみ見せるなんてトンデモナイ！）

クリスのパニックは、実は一般職業【貴婦人】が原因だ。

プレイヤーであるクリスは知らないことだが、【貴婦人】には【淑女の謹み】という隠しアクティブスキルが存在する。

ゲームではNPCへの高感度アップ補正に留まるが、こちら側では少々勝手が異なっていた。対人スキルに更なる有利な修正が加えられる代わりに、使用者に女性としての仕草や立ち振る舞い、羞恥心を芽生えさせるスキルだ。

一見無駄に思えるスキルだが、実はクリスにとって重要なスキルだ。なぜならクリスは地球世界では桐生徹という男だったのだから。

男性は仕草ひとつをとっても女性とは異なる。

例を挙げるなら着席する場合を見てはどうだろうか。男性は無意識に脚を開くが、女性は脚をそろえて座る。これは男の脚の間には閉じるにはジャマな物があるからだが、長年続けていると脚を開いて座ることがあたりまえになり早々改めることは出来ない。

身体は少女でも、その中身が男ではどうしても仕草や態度に男らしさが表れ違和感が残る。それを補正してくれるのが【貴婦人】であり【淑女の謹み】だった。

クリスにとってはとても有難いスキルではあったのだが、現状のような四人の視線の集中砲火を受けている状態ではむしろマイナス面が目につく。

あられもない格好を男に見られたという羞恥心がクリスの心に爆発的に広がった。つい一週間前には男だったクリスにはまったくの未知である女性の羞恥心に心を乱され、思考がぐるぐると回転する。

（あんな格好を人に見られた見られた見られた見られた！ むむむ胸見られたー！）

「にゃあああー！」

「どへえー！」

パニックが最高点に達したクリスは、悲鳴とともに無秩序に魔力を放出してしまった。

魔術に転化されてない単純魔力とはいえ、大規模魔術を数十発撃つても平然としているクリスの魔力だ。並みとは違う。しかもそれが無秩序に放出されたのだ。それはすでに強力な魔術とすら言える。膨大な魔力の奔流に巻き込まれたアーサー達は、見事なくらいに吹き飛ばされもみくちやにされて気を失ったのだった。

「すすす、すみません、すみませんっ」

パニックから立ち直ったクリスは自分がしかした大惨事に青ざめ、即座に気を失っている四人を介抱した。とはいえ単純魔力の放出であるため四人に怪我らしい怪我はない。精々、吹っ飛ばされた衝撃で体の各所に打ち身がある程度だ。

地面にシートを敷き、アーサー達はマグロのように並んで寝かさ

れている。それぞれの額には濡れタオルが置かれていた。

アーサーだけが半身を起こし、ふらつく頭を抑えつつ目前で謝罪しまくる少女を眺めていた。

クリスは着替えたのか件の衣装ではなく、パンツァージャケットにスカートという普段の服装に戻っていた。

アーサーの前で少女はひたすら恐縮している。

その様子は、ヘカトンケイルを一撃で屠った大魔術を操る魔術師にはとても見えなかった。はからずしもその一端を我が身で味わうことになりはしたが。

クリスへの恐れが無くなり、等身大の姿になった少女を視界に納め、くすりと笑みをこぼすアーサー。

「そう恐縮しないでくれ。言わば、まあ、事故みたいなものだ。お互い忘れよう」

可憐な（アーサーにはそう映った）姿をもつと見たかったかな、などと不謹慎な考えが過ぎるが頭の隅に追いやる。

「改めて自己紹介をしよう。私はアーサー。アーサー・オーランド。エスクリード王国の騎士だ」

あつさりと身分を名乗るアーサー。傍らで轟沈していたランスロットが親友の思わぬ言葉にピクリと反応する。

「あ、はい。私はクリステイナ・グイネヴィア・ロウゼンです。冒険者をしています」

「冒険者？ ああ、だから狩りで荒野にいたのか。それにしても良い腕だ。お陰で命拾いしたよ。なにか礼がしたいのだが」

（狩りね。ゲーム時代の狩りは魔物や『蟲』相手が主だったけど、今じゃ自動兵器狩りが冒険者の主な仕事になっちゃってるのかな。それはともかく……）

タイミングを見計らってこの世界の事情を聞き出したかったのだが、なぜかアーサー相手に切り出せず躊躇ってしまうクリスであった。

「礼をされるほどのことはしていません。私は狩りをしていただけですから。・・・勢いあまってやりすぎてしまいました」

「ああ、あの大魔術か。あれほどの大魔術初めて目にしたよ。君はどこで魔術を学んだのかな？ リンクドラムの魔術学園……ではないか……」

リンクドラム魔術学園とは、アリストリア大陸東の一角に位置するリンクドラム王国国立の魔術師養成校のことを差す。毎年優秀な魔術師を輩出していることでも有名だ。

この王国は、魔動術全般のこの時代にあつてかたくなに古の秘術を守り通している保守的な国だ。自然、魔動術を嫌う土地柄で、王族からして優秀な魔術師であり、魔術師の地位が他国よりも高いという大陸では珍しい国家だった。

国を挙げて魔術師の保護・養成を行っており、外部からも多くの魔術師が参入していた。

（あっちゃー。やっぱり探り入れてきてるよ、この人）

クリスは内心溜息をついた。が、当然と言えば当然と言える。

リンクドラムは古代魔法王国直系を標榜し、魔動術を多用する周辺諸国とのトラブルが絶えない国なのだから。そもそも自動兵器は魔動術の産物であり、その反乱が世界に混乱をもたらす数多の犠牲

者を出したのは魔動術の根本的な過ちが原因だと公言している。

クリスガリンクドラムの出身だとしたら、騎士として警戒するのは当然だ。

苦笑しつつ、左手袋の甲に装着してあるマギスジエムを示すクリス。

「それは聞かぬが花ですよ」

マギスジエムは魔動術最大の発明品と言われている。

魔術アイテムの究極の形。すなわち、マギスジエムに複数の術式を封入し、必要に応じて選択・起動・実行する。地球世界のパソコンとソフトウェアの関係に酷似している。

これまでの魔術アイテムはひとつにつきひとつの術式だったが、マギスジエムの発明で、ひとつのアイテムで複数あるいはそれ以上の魔術を使い分けることが可能になった。

魔動術はこの時代において文明の礎であり基本でもある。

かつて世界を席卷していた古代魔法王国。魔術を使える魔術師が特権階級として魔術を使えない多くの民を支配していた。魔術の素養の無い者にとって屈辱と隷属の暗黒時代。

千年前、魔法王国が謎の崩壊で滅んだ後、心ある一部の魔術師達が二度と魔術を特定の者に独占されないよう試行錯誤の未完成させたのが魔動術の始まりとされている。時代が下ると錬金術や機械技術を取り込み、独自の進化を遂げて現在の姿へと至る。

魔術の素養が無くとも、魔術が付与された道具は使い方さえ知っていれば誰であろうと使える。照明の魔術と照明が付与された魔術アイテム。どちらでも明かりが灯るのは同じだが、前者は魔術師にしか使えないが後者は誰もが扱えた。

誰でも簡単に魔術を使える新しい魔術体系、それが魔動術だ。

魔動術の登場で、秘術とされた魔術は誰もが扱える便利な道具となった。

特別な存在で居られなくなった魔術師は、魔動術を敵視する者が多い。その代表格がリンクドラム王国だが、彼らとは異なる考えをする魔術師がいるのもまた事実。そういった者達は野に下り、ひっそりと私塾を開いて古の業を継承している。魔動術への敵意を持つ者も少ない。

中にはリンクドラムの魔術師達でさえ知らない術を知る者もあり、魔動術への抵抗が少ない野の魔術師達はリンクドラムの魔術師達にとって目の上のたんこぶだ。

噂ではそういった者達を懐柔・暗殺する特殊部隊があるとかないとか。

クエストでリンクドラムに行った時は苦労したなーと感慨にふけるクリスであった。

その手の情報はゲーム内でも聞かされており、クリスも熟知していた。ゆえにマギスジエムを見せれば私塾で学んだと察してくれると考えたのだ。

同時に、私塾で学んだものは自らが魔術師であることや師の名を伏せる場合が多い。リンクドラムの追及をかわすためだが、これもクリスには都合が良かった。

アーサーも「それは失礼した」と素直に引き下がってくれた。

「キ、キミっ！ あの自動兵器はキミが仕留めたのかい!？」

突如、ランスロットの素っ頓狂な声が響く。

「突然どうしたんだランス。彼女が引つ張っていたキャリーなのだから、彼女が仕留めたに決まっているだろう。それより人の成果を

じろじろ見るのは不躰だぞ」

新たな質問を振ろうとして遮られたアーサーは、やや不機嫌に友を嗜める。しかし当のランスロットは興奮しているのか聞こえていないようだ。

クリスのキャリアーはシートで覆われ中の全容はうかがえないが、納め切れなかった自動兵器の脚部がニョキッとシートから突き出ている。

スクラップでも売れるかもしれないと、拾えるものは拾ってきたのだ。

「アーサー！ これを見てみるよ、コレコレ！」

「なんだと言うのだ、まったく。あー、すまない。荷物を見せてもらっても良いだろうか？」

「それはかまいませんが、あの人は何に興奮しているのでしょうか？」

「わからん。あれは魔動機械が絡むと人が変わるんだ」

ぼやきながら友人の元に向かうアーサー。付き添うクリス。ランスロットはキャリアーの荷台から突き出ている自動兵器の脚部に一人興奮していた。子供のような顔でぺたぺたと触りまくっている。

「人のものを勝手に触るなと・・・むっ！？」

「君も気が付いたかい？ この自動兵器は今まで見たことの無いものだよ。えーと、キミ。クリステイナ君だっけ？ この自動兵器はどこで仕留めたのかな？」

アーサーもランスロットも見たことが無いのは道理だ。クリスがオルテアで仕留めた自動兵器は新型の先行試作機なのだから。

近年力をつけてきた人類に対する対抗機として開発されたものだ。高出力AMFや電磁投射砲など、自動兵器群にとって搜索部隊が組織されるほど超重要機密満載の機体なのだ。

クリスにはまるで通用しなかったが。

「ああ、この機体ですか。これはオルテアの街で遭遇したものです。いきなり撃ってきたから撃破しましたけど」

これにはアーサーもランスロットも驚いた。

オルテアの街は自動兵器にとって重要な戦略拠点だ。その奪回は人類側にとって悲願といえるが当然警備はすさまじく、道中は自動兵器の大軍に阻まれ近づくことも出来ない。

もつとも、そんなこと露とも知らぬクリスの実験と証する超絶破壊活動により、街の警備隊はことごとく破壊されたしまったのだが。

自動兵器反乱前の知識しないクリスにとって、街を警備する自動兵器はあつてしかるべき存在だ。ましてクリスは事情を知る人間を探していた。まさか自動兵器が自分を取り囲み、隠れて攻撃を仕掛けようとしていたとは考えもしなかった。

包囲を完了した自動兵器が集中砲火を行う直前に、クリスの広範囲無節操破壊魔法の「実験」が開始され、その大砲撃の連射でことごとくスクラップと化したのだった。

その破壊の威力はすさまじく、街の数ブロックの区画がまとめて消滅してしまったほどだ。自動兵器群にとってさらに不幸だったのは、その消滅したブロックの中に自分達の地下基地があつたことだろう。むろんそれらは消滅したブロックと共に露と消えた。

「キ、キミはオルテアに行ったのか!？」

「よく無事だったな。さすがと言っべきなのか・・・」

「無人の街でしたよ?」

「それは確かにそうなのだが」

オルテア行つて無事に帰ってくるなど聞いたことがない。改めてクリスの実力に驚かされるアーサー達である。

クリスとは言えば、二人の驚きように首を傾げるのみだ。なにせクリスにとつてオルテアの街は、本当に「人のいない」廃墟だったのだから。知らずの内に壊滅させられた自動兵器群こそ哀れだろう。

「クリステイナ君！ この自動兵器を売ってくれ！ 五万、いいや八万だそう！」

スクラップにしては破格の値段だ。ただし、価値を知るものはその数倍の値が付いても欲しがらるだろう。なにせ自動兵器の先行試作機。破壊されているとはいえ重要機密満載なのだから。

とはいえかなりの高額な値段に、いつの間にか復活していたハリソンとランバートも驚いていた。八万あれば家族四人で一年間充分生活できる。

しかし、クリスの反応は薄かった。

「ええ、いいですよ」

なにせクリスの財産はそのほか上だ。驚くほどの金額ではない。

「ただ、今は手持ちが無いので街に帰ってからになるけど、いいかな？」

「街というとラスカーシャですか？ それともお国の街？」

「ラスカーシャだよ。そこに僕たちの拠点があるんだ。国から研究費と活動資金をいっぱい貰ってるからそれで払うよ」

「おひおひ」

いきなり機密を漏らすランスロットに、そろって裏手突っ込みするハリソンとランバート。

最重要機密は漏らしていないが、国がらみの人間だと公言したランスロットに苦笑するアーサー。もっとも先に王国騎士と名乗った手前、あまり強く諫める事は出来ない。

「では金はラスカーシャで払うとして、街までまで同行願えるかな。そう言えばクリステイナ嬢は冒険者だったね。ラスカーシャは長いのかい？」

「いえ、私は流れの冒険者ですので、ラスカーシャを拠点にしている訳ではないです。ラスカーシャのギルドに登録もしてないですし」「ほう。では今まではどちらに？」

「いろいろですよ。西も東もいろいろ回りました。ここ最近は荒野に出ずっぱりでしたので、海が見たくてラスカーシャに行こうと思っていた所でした。っと、出発の準備をしますので、私はこれで」

いささか強引に話を打ち切り、ぺこりと頭を下げるとクリスはテイエLEDに向かって走り出していた。小走りで走り去る小さな後姿を眺め、アーサーは思わず頭をかく。

傍らに寄ってきたランスロットがにやりと笑い言った。

「探ってばかりいると嫌われちゃうよ？」

「職業病というやつかな。つい癖でね」

肩を竦めるアーサー。

「にしてもキミ。えらく彼女のことに気にしているようだけど」

「それは当然だろう。あれだけの人材だ。少しは噂が立っていてもよさそうなのに、少しも彼女の噂を耳にしたことがない。気にするなというほうが無理だな」

「それだけかい？」

「・・・なにが言いたい？」

人の悪い笑顔を浮かべ、ランスロットが言った。

「べつにー。さて、我々も出発の準備をしようじゃないか。いつまでも彼女の後姿を追ってないでさ」

第05話 魔法騎士へミラクルナイトへ変身セットと淑女の嗜み（後書き）

次回でようやく街に到着。展開、遅っ！

H23/10/04 ご指摘を受け一部表現を変更。

第06話 私は冒険者として歩み始めた、とか言ってみる

レゲン山脈を北から南に抜ける細く入り組んだ溪谷を抜けだしたクリス達一行。

夜の間に溪谷を抜けるのは危険と山に入る手前で一泊。翌朝から出発しても溪谷を脱するころには夕暮れ間近になっていた。

「ふえー。ようやく溪谷抜けたー」

展望室のハッチを開いて身を乗り出し、吹く風をあびるクリス。溪谷の街道は思っていた以上に大変だった。なにせ街道は細く、安全を考えるなら機甲騎兵を二機並べて歩くことが出来ない。道を踏み外せば谷底にまっさかさまだ。

魔物や野盗への警戒も必要になる。狩りを終え、ラスカーシャに帰る冒険者を襲う野盗もいるので油断は出来なかった。

「少し先に開けたところがある。今夜はそこで夜営にしよう」

先頭に行くアーサーの声がヘッドホンを通じて伝わる。

拡声器越しでは何かと不便なので、アーサーが通信コードを教えていたのだ。

ラスカーシャまでまだ距離がある。あえて無理をする必要のない一行は夜営することを選んだ。

「ようやく一息つけるよ」

「泊まれる場所に着的いたらすぐに夕食の準備しますね」

「嬢ちゃんがいてくれると、うまい飯にありつけるから有難いよ」

「ホントホント。保存食と硬い黒パンじゃ味気ないからな」

渓谷を抜けて気が抜けたのか、一行の口も軽くなっている。無線機を通じて雑談を交わしていた。

「お世辞を言っても品数は増えませんか？」

「お世辞でなく、クリステイナ嬢の作った食事は本当に美味しいよ」

それは当然と言える。

無駄に全職業をコンプリートしたクリスは、一般職業【料理人】クラスも100レベル。一流レストランの調理長も頭を垂れて教えを請うほどのレベルなのだ。

野外であり本格的な器具も足りないが、絶妙な火加減と塩梅で一行の舌を大いに満足させていた。クリスは食料アイテムのほかに食料アイテムを作るための食材も買い溜めしており、それが活きたかたちだ。

クリスは昨夜から食事当番を引き受けていて、その腕前は大変好評だった。

二十分ほど歩くと、側に小川が流れる開けた場所が見えてきた。街道を旅する人のために主だった街道には所々に同様の広場が設けられている。

そこにはすでに先客がいて夜営の準備をしていた。駐機体勢の機甲騎兵が三機と戦車が一両。統一された外装は無く機体もばらばらだ。おそらく冒険者だろう。

近づくクリス達に気が付いたか、騎手らしき人影が騎兵に乗り込むのが見えた。警戒の為だ。立ち上がったのは一機だけで、他は駐機体勢のままその場に留まっている。立ち上がった一機も楯は装備しているが武器には手をつけず、両手を広げて敵意の無いことを示した。

一行の先頭に行くアーサーも同様に手を広げて敵意の無いことを

示す。

クリス達は先客から少し離れたところで互いに背を向け、半円陣で駐機体勢をとる。

「向こうに挨拶に行ってくる。ランバート、一緒に来てくれ」

「了解しました」

機体から降りたアーサーが告げ、ランバートを伴い先客の一団に向けて歩いていった。

「僕たちは夜営の準備をしておくよ」

「私は食べられそうな野草がないか探してきます」

「俺も一緒に行こうか？」

「奥には行きませんから大丈夫です。それより、ランスロットさんを一人にしておくアーサーさんに怒られますよ？」

クリスの身を案じたハリソンが同行を申し出るが、クリスはやりわりと断り一人で森に入った。

視界の隅に近距離レーザーを表示し、警戒を怠らず野草を探して歩き回る。食料になる獲物でもいればついでに狩って帰ろうとウェポンボックスから弓を取り出した。

（隅っことは言え視界を遮られるから普段は使わないけど・・・便利だよ、コレ）

二十分ほど森の中を探し回り、一般職業【クラス猟師】の技能を存分に発揮して獲物を仕留めるとホクホク顔で広場に戻った。

偉大なり近距離レーザーである。

僅かの間で野草・香草を集めただけでなく、野鳥や野兎まで仕留めてきたクリスにアーサーは苦笑するのみだ。ハリソンなどは食事

が豪華になったと大喜びしている。

「生活力あるな」

感心するアーサーに「冒険者ですから」と、すまして答えるクリス。すぐにお互い笑いあった。

クリスは獲物の処理を手早くすませ食事の支度に取り掛かる。かまどと火はランスロットが用意してくれていた。

今夜のメニューは兎肉と野草を煮込んだスープ。野鳥の香草焼き、薄く焼いたパンケーキだ。思いのほか豪華になった食事に舌鼓を打ちつつ、クリスは先客の冒険者達のことを尋ねた。

「彼らはラスカーシャを拠点にしている中堅どころの冒険者だ。顔を見たことがあるので間違いない。評判は悪くないし、必要以上に警戒しなくてもよさそうだ」

パンケーキに鳥肉をはさみ一口齧る。染み出た鳥肉の油がパンケーキの香ばしさとあいまって美味い。一緒に焼いた香草が野鳥独自の臭みを消し、絶妙の塩加減が野趣溢れる味に仕上げていた。

思わず笑みがこぼれる。

「本当に美味いな」

「こっちのスープも凄いよ！ 手軽に作ったとは思えない味だよ」

ランスロットも大絶賛だ。

「喜んでいただけでなによりです」

素直な賞賛の声が嬉しくて、はにかんだ笑みを浮かべるクリス。大満足の夕食を終え食後のお茶と共に軽い雑談を交わす。すでに

この頃にはアーサーの探りの会話もなくなっていたので、クリスも随分気が楽になっていた。

後片付けを済ませた後、夜番のクリスを残しアーサー達は早々に寝袋に包まって寝入ってしまった。

当初、アーサーはクリスを夜番から外そうと提案したのだがクリスはこれを辞退した。どのみち冒険者としてこの世界で生きていかなければならないのだ。

いくら職業クラスがあるうとスキルレベルが高かろうと、心がなんちゃって冒険者では仕事に失敗するのは目に見えている。自分の命がかっているのだから甘えてはいられない。

爆ぜる火を眺めつつクリスは自分に喝を入れた。

自由都市ラスカーシャ。

アリストリア大陸南西部にある、二つの半島にはさまれた湾の最奥部に位置する港湾都市だ。都市前の内海は海洋資源に恵まれ、豊かな海の幸を住民に提供している。

八十年前の自動兵器反乱前は小さな漁港があるだけの漁師街に過ぎなかったが、内陸部から逃れてきた人々を受け入れているうちに大きな街へと変貌していった。

ラスカーシャには王も領主もない。

元はカデスト王国の一端だったが王国は自動兵器の大軍に攻め落とされ壊滅。領主は領民を捨てて逃げ出した。街を防衛したのは残された領民と逃れてきた人々。そして冒険者達。

現在は市民代表が行政の長を勤め、陸と海共に大陸の西東を繋ぐ

通行の要所、自由都市として発展を続けている。街の発展を促したのが人類に牙を剥いた自動兵器群というのは皮肉だろうか。

街の住民は冒険者に対して友好的だ。というのも八十年前、街を襲う自動兵器の一団から街を守れたのも居合わせた冒険者達の活躍によるところが大きかったからだ。

その後も彼らは住民と協力し、防衛隊を組織して街と人々を守りぬいた。二つの半島を結ぶように連なるレゲン山脈が、北からの自動兵器侵攻を阻む天然の城壁となったことも幸運だったと言える。

いまだ自動兵器の脅威は消えることはないが、自分達で街を守りぬいたという自立自尊の心が住人達の表情を明るくし、活気となって溢れていた。

翌日、一行は無事に冒険者ギルドに到着した。

ラスカーシャの冒険者ギルドは街の西の外にある。

機甲騎兵や車両持ちの冒険者もいるため、ギルドには広い敷地が必要で城壁の内側に納めることは難しい。最初は街の外にあったが、街が広がるにつれいつの間にか城壁の内側に取り込まれてしまった。そこで八年前に思い切って街の外に引っ越したのだった。

ラスカーシャの冒険者ギルドは広い。

ラスカーシャの街で、ひとつの施設としては一番の広さだろう。

なにせドーム球場七つ分はある。その敷地内には車両の駐機場、簡単な修理が出来る貸しガレージ棟や倉庫棟、本格的な整備のための工場に研究棟。魔法や銃器の試射場まであった。

ギルド建物は敷地の奥のもっとも街に近い場所にある。ギルドで

働く事務員や整備士は街に住んでいるので必然的にそうだった。彼らや街に出かける冒険者が出入りする為の専用通路も設けられている。

城壁を挟んだ向かい側にも冒険者ギルドの施設があり、そちらは車両を持たない冒険者達のための施設だ。

「これってドコの傭兵基地？」

地球世界のニュースで見た軍事基地のごとき光景に目を奪われるクリス。

屋根のない駐車場に、様々なタイプの戦車などの装甲車両、機甲騎兵が立ち並んでいる。攻守のバランスの取れた傑作機ロナルディナ。優美な外見ながら突撃速度なら何者にも負けないガレンハルト。大剣を扱わせれば並ぶべき物のないイグベルなど、まるで博覧会だ。

それらの機体や車両に統一性が無く、正規軍ではないことが分かる。

機体の間を行き交う人々も装備はバラバラだ。パンツァージャケットを着ている者もいれば、昔ながらの鎧を着込んでいる者もいる。

「プレートメール着て戦車に乗るってどーなのよ・・・」

（そう言えば、ゲームでもプレイヤーはてんでバラバラな装備着て乗ってたっけ）

ゲーム内ではなじみの光景だったが、「まさかそれをリアルで見るとは」と、少々頭痛のするクリスであった。

「クリスティナ嬢はラスカーシャは初めてだったか？」

眼前の光景にあきれているクリスの背後から声がかかった。アイ

サーだ。

ゲーム内では何度か来たが、そのときはただの漁港だった。

「ええ。不思議と縁が無くて。すごいですね（いろんな意味で）」

「ここまでの規模の冒険者ギルドは大陸でも珍しい。私も始めて見たときは驚いたものだ。さすがは冒険者の街だな」

「なんだかすごく雑多ですけどね」

「それは仕方がない。なにせ彼らは個人の集まりだからな。騎士や軍のような使命感はないし、部隊としての強さもない。が、小数としての突破力や粘り強さといったものは軍以上だ。冒険者の強みだな」

二人並んで光景を眺めている。

一行はギルド敷地内の貸し倉庫に入り機体を休めていた。ここはアーサー達が借りている大型の倉庫だ。大型ゆえ予定外のティエレDが入ってもまだ余裕がある。

ランスロットは到着と同時に「お金を取ってくる」と言って、街中の拠点に向かっていた。護衛としてランバートが同行している。出発の際「そのパーツ、ほかの誰にも売らないでね。あ、できれば見せるのもやめて」と何度も念を押していた。

（そこまで念を押さなくても、買ってくれるならちゃんと売るんだけどなー。というか、見せるなってどういうこと？ そんなに珍しい機体なのかな？）

冒険者ギルドでは自動兵器のパーツ買取を行っている。

有力な鉱山を幾つも自動兵器に押さえられ、資源が不足気味な人類側はそれを補う為、例えばスクラップといえども買い取り再利用していた。

それに加え、自動兵器を研究解析することで新たな技術の取得し、

少しでも反抗の手掛かりにしようとしている。だが各国は、国益を優位し獲得した技術をなかなか自国の外に出そうとしない。こと此処にいたっても、人はわが身を優先するという愚かな行為を捨てきれずにいる。

そのため冒険者ギルドでは、所属する冒険者に獲得した自動兵器のパーツをギルドに優先的に売るよう要請していた。獲得した技術を広く世界に伝え、一国による技術の独占を防ぐ為だ。

クリスの行為は冒険者としては規範に反するが、いまだ本人が無所属であることを知るランスロットは平気な顔だ。その辺の事情を知らないクリスも特にどうも思っていないかった。もし知っていたら売らなかつたかもしれない。

もつとも、ギルドとて「自動兵器捕獲の依頼を受けた」と言われれば強くは言えないが。

「ランスロットが戻り次第、我々は帰国の準備にかかるが、クリスティナ嬢はラスカーシャに留まり冒険者を続けるつもりかな？」

「はい。そのつもりです」

「ふむ。出来ればわが国にスカウトしたいくらいなのだが。私もクリスティナ嬢がいてくれれば嬉しい」

「あはは。私に宮仕えは無理ですよ。何より自由な立場で居たいですしねー」

天真爛漫に笑うクリスに苦笑するアーサー。

国に迎えたいと言うのは本心だ。これほどの人材を王国に取り込めるなら、どれほどの益が見込めるだろうか。しかし、軽く話を振ってみたもののあっさりと流されてしまった。肩を竦めるアーサー。

「やれやれ。フラれてしまったか。だが、もし考えが変わったら連絡をくれ。喜んで迎えよう。冒険者として近くに来たときも連絡を

くれれば嬉しい。その時は我が家自慢のサングリアをご馳走しよう」
「楽しみにしておきます」

うれしそうな笑みを浮かべるクリス。つられてアーサーにも笑みが浮かぶ。

「ふたりだけの時間を邪魔して悪いけど、やほー。戻ってきたよー」

突如、能天気な声が響いた。手には紙袋を提げている。
顔にはなにかを楽しむような、意地の悪い笑みが浮かんでいた。

「・・・なにを言っているんだ、お前は」

「お邪魔虫ごめんねってことで。はいこれ、クリスマスちゃん」

「これは？」

受け取った紙袋を不思議そうに見るクリス。

「あれの御代」

「ああ、なるほど。確かに受け取りました」

受け取った紙袋の中身を確認することなく懐にしまいこんだクリスを見て、ちよつとした悪戯心が芽生えたランスロットはにやりと笑って言うてみた。

「そんなに簡単に信用しちゃっていいの？ ひよつとしたら騙しているかもしれないよ？ ケチって全額入ってないかもしれない」

「大丈夫ですよ。もし騙していたら全力で呪いますから。たぶん後悔も出来なくなります」

帰ってきたのは想像以上に恐ろしい答えだった。しかも無邪気な

微笑み付きでの。

「そそそそうなんだ。大丈夫。ボクハ騙シタリシナイヨ？」
「そう願います。お互いの為に」

その無邪気な微笑みの向こう側に空恐ろしいものを感じ、言葉遣いがおかしくなるランスロット。冷や汗が止まらない。
助け舟を出してくれたのは友人だった。

「クリスティナ嬢はラスカーシャのギルドに登録するのだろうか？
よければハリソンに案内させようか？ 彼は元冒険者なんだ。私がスカウトする前はこの街を拠点に活動していたね。ギルドにも詳しい」

「んー。大丈夫です。もうギルドの敷地内ですから。それでは、みなさん。短い間でしたが大変お世話になりました」

アーサー達を見渡し、スカートの裾をつまんでぺこりと頭を垂れるクリス。歳相応の可愛らしさ満点だ。

「いや。世話になったのはこちらのほうだ。君のお陰で大事な友と部下の命を救うことができたのだから。改めて礼を言おう。ありがとう」

「あれー、クリスちゃん。やっぱり行っちゃうの？ 僕達と来ればいいのに」

「嬢ちゃん、世話になった」

「また会おうぜ」

「縁があれば、また」

それぞれに別れの言葉を交わし、クリスはティエレに乗り込みその場を後にした。といってもギルドから出るのではなく、受付のあ

る建物近くの駐機場に移動するだけだが。

結局、アーサー達から自動兵器反乱についての情報は得られなかった。しかし、それほど心配はしていない。ギルドか街に行けば図書館ぐらいあるだろう。そこで調べればいいやとクリスは考えていた。

ギルド敷地内ではローラーギア禁止のため、ティエレを歩かせて駐機場に向かう。

死角の多いギルド倉庫街を出て人の多い事務所建物に近づいていくと、ティエレDに気付いた冒険者や作業員が驚いたように作業の手を止め視線を向けてくる。

見たことのない重装甲の機体。おまけに背中に大砲を背負っていたれば嫌でも視線を集めるので無理もない。

「あまり目立ちたくないんだけどなー」

クリスは狭い操縦席内で独り言ちた。

自分はこの世界ではよそ者だとクリスは考えている。何の因果かこの世界で生きていくことにはなったが、あまり派手なことはず、ひっそりと世界の片隅を間借りできるだけがいいと思っていた。ならこんな重装甲騎兵に乗るなよという話なのだが、それだけはそれだけは許してほしいクリスであった。

スペースの開いている駐機場で駐機体勢をとり機体から降りる。

ごつい機甲騎兵から降りてきた小柄で愛らしい少女を見て、周囲のギャラリーがどよめいた。さもありなん。見慣れぬ機体に注目していたギャラリーにとって、あまりに予想外の騎手だからだ。

その騎手は、「とてとてとて」と擬音でも付いていそうな足取りで事務所建屋に入っていく。

目が合えば愛らしい笑顔を振りまき通り過ぎていく少女に周囲は

騒然となった。

「おいおい、あの娘だれだ？」

「見かけない顔だが・・・」

「誰かの子供なのか？ やたら可愛い娘だな」

新人が来れば、世間の厳しさを教えてやるぜ的なお節介をしてくる意地の悪い冒険者達でさえクリスには声を掛けられずにいた。というか、あの年頃の少女に声をかければたちまち名誉ある変態の称号を冠してしまう。近づくことさえできない。ただ遠巻きに見ているだけだった。

使い込まれた両開きの扉を開き、ギルド建物の中に入る。

フロアの間取りだけを見れば、どこかのフランチャイズのファストフード店のようだ。入ってすぐのところに受付カウンターが並び、その脇を抜けて左奥には衝立が並べられている。衝立には依頼書らしき用紙が貼り付けられていて、仕事を探している冒険者達が熱心に依頼内容を吟味していた。

右手にはテーブルとソファが並べられ、何組もの屈強そうな冒険者が雑談に花を咲かせている。テーブルの上にはビールやワインの入ったグラスが置いてある。ギルドでは冒険者相手に軽食なども提供しているのだろう。

強めの酒類が見当たらないのは酔っ払い対策だろうか。

クリスは受付カウンターに真っ直ぐ歩いていった。カウンターには二十代半ばの女性が手元に視線を落とし、何かの書き物をしている。

足音で誰か近づいてきたことに気づいたか、作業を中断し営業スマイルを浮かべた。

「ようそこ。ラスカーシャ冒険者ギルドへ。今日はどのような物件でしょうか？ お仕事の・・・依頼・・・この用紙・・・？」

営業スマイルを浮かべるマニュアル通りの対応が、徐々に尻すばみになる。

当然だ。冒険者ギルドに用がある者は、仕事をしてもらいたい依頼人が仕事を探している冒険者。間違っても十代前半の愛らしい少女ではない。

奇妙な闖入者に気づいたギルド事務員や冒険者達の視線が集まり始めた。

「えーと、お嬢ちゃん。パパを探しているのかな？」

「いえ。冒険者の登録に来ました」

「「「「「え！？」「「「「「

きつぱりと宣言したクリスの言葉に、今この場にいる全員が凍りついた。

「冒険者として登録したいのです。お願いできますか？」

「えーと、お嬢ちゃん。ここは冒険者ギルドなの。お嬢ちゃんのよに可愛い娘が入ってきちゃいろいろと危ない所なのよ？」

「しかし、冒険者として登録するには冒険者ギルドに赴かなければなりませんし」

「冒険者って・・・お嬢ちゃんが？ お嬢ちゃん、おいくつ？」

「十七歳です」

「「「「「え！？」「「「「「

再び周囲が凍りついた。

ラスカーシャの街がいかに冒険者に理解があるとはいえ、仕事の仕事だけに登録には年齢制限がある。ほとんどの冒険者ギルドでは、

登録可能な年齢は成人年齢である十五歳以上となっていた。

童顔のせいもあり、クリスはどう見ても12〜13歳くらいにしか見えない。

クリスは心の中で泣いた。

（くう。疑われているっ！ こんなことならキャラメイクの時もつと大人びた外見にするんだっただ！）

「お嬢ちゃん。ホントに十七歳？」

「証明しろと言われても困りますが、ホントに十七歳です」

疑いマナコの受付嬢はカウンターの下からなにかごそごと取り出し、クリスの前に差し出した。それは縦横30×20cm、厚み5cmほどの箱で、表面に人の手形のような絵が書かれている。

「ちよつとコレの上に手を置いてくれる？」

「こうですか？」

言われたとおりクリスは箱の表面に右手を置いた。箱の表面に何かを読み取るような線が手前から奥にと走り、受付嬢側の小さな画面に文字が表示される。その文字を読み、受付嬢は納得したように小さく頷いた。

「お嬢ちゃん、吸血鬼族の方だったのね。疑ってごめんなさい。なにしろこの街では冒険者志望の若い子が多くて、たまに年齢を偽って登録しに来る子がいるのよ」

箱は種族や年齢を調べる魔動機械らしい。この街ではこのような魔動機械が必要とされるほど、年齢詐称する冒険者志願が多いのだろっ。

「なるほど。吸血鬼族か」
「どうりで」

クリスの背後からギャラリーの納得する呟きが聞こえてきた。
吸血鬼族はエルフ族やドワーフ族同様長命の種族だ。その成長速度は人間より遅いことで知られている。実年齢が十七歳であろうと、外見が十三歳程度にしか見えなくても不思議ではない。

「では、こちらの用紙にお名前と種族、年齢と所有車両を記入してください」

言われたとおり、用紙に必要事項を記入していく。

一生懸命書き込んでいくクリスに、周囲からは微笑ましい視線が注がれていた。なんとなく「んしょ、んしょ」という擬音でも付いていそうな感じだからだ。

記入を終えた用紙を受付に差し出す。内容を確認している受付嬢の目がある一点でとまった。

「あら。機甲騎兵をお持ちなんですか」
「はい」

周囲のギャラリーが再びざわついた。

装甲騎兵を所有することは、冒険者にとって夢であり憧れであるからだ。なにせ既存の車両とは戦闘力が違う。AMF影響下にあれば機動力と魔法攻撃力は失うものの、唯一自動兵器や『蟲』と互角に戦える兵器であることは間違いない。

工業力の低下した人類側は生産力に限界があり、各国とも自国内の軍部の需要を満たすのでやっとだ。冒険者に回す余裕は少ない。当然価格もうなぎのぼりで、機甲騎兵は一介の冒険者には簡単には手が出せない代物なのだ。

まれに軍部から冒険者ギルドへ払い下げの機体が出てくるが、中古といえどけつして安くはない。ほとんどの冒険者は戦車ですら賄えず、価格の安い戦闘車両で仕事をすることになる。

冒険者の街といわれるラスカーシャでさえ、機甲騎兵持ちは百人としないのが現状だ。機甲騎兵は、多くの冒険者にとって、いつかは手に入りたい成功者の証なのだ。

クリスを見る冒険者達の眼が、やつかみ混じりの嫉妬を含むものに変わっていく。その視線を読み取った受付嬢はクリスにそつと忠告した。

「・・・お嬢ちゃん、気をつけてね。人の騎兵を強奪する不良冒険者はこのギルドにはいないと思うけど、いろいろ嫌がらせをされるかも」

「冒険者も大変なんですネ。ありがとうございます。気をつけます」

「登録作業は二時間ほどで終わるから、それまでの間、整備部で機体のチェックを受けてきてくれる？ 整備部は建物を出て左側奥の大きな工場よ。この用紙を担当の人に見せてね」

「はい。わかりました」

用紙を受け取り、クリスはギルド事務所を後にした。

ティエレに向かうと、そこには人だかりの山ができている。常識はずれの重装甲を持つ見慣れない機体。目立つなというほうが無理だった。

「始めてみる騎兵だな。なんだこれ」

「ごつつい装甲。こんな重装甲で本当に動くのか？」

「誰のなんだ？」

「さっき、やたらちつこいのが出てきて事務所の方に行ったみたいだが」

「えゝ！？ さっきのあれが騎手なのか？」

すぎ放題言っている。

クリスは肩を竦め、輪の中に入っていた。

「すみません。ちょっと通してください」

「お？ なんだい嬢ちゃん。迷子にでもなったのか？」

「いえ。あの騎兵は私のなので」

「「「「はあ！？」「」「」」」

非常識な発言に凍った冒険者達を掻き分け、クリスは片膝を付く騎兵の手足を伝って駆け上がる。やたら手馴れた様子で乗り込んだ小柄な少女に、ギャラリー達はあっけに取られていた。驚く冒険者をよそにティエレが起動、立ち上がった。

「おいおい、マジかよ」

「あんなガキが騎手だって？」

『動かしますから、ちよつと退いててもらえます？』

拡声器を通し騎手から注意が飛んだ。人だかりが数メートル後ずさる。

啞然とする冒険者達をよそに、重装甲機甲騎兵は悠然とその場を後にするのだった。

「班長！ 妙な騎兵がこっちに来ますよ！」

近づいてくる見慣れない重装甲の機甲騎兵を指差し、若い作業員が騒ぎ始めた。休息していた整備班班長ステファン・グラスは飲みかけのコーヒークップをテーブルに置いて作業帽を被る。

「若え連中が騒いでいた奴だな。おおかた機体チェックに来るんだろ。おい、空いてる整備架台に案内してやんな。手の空いてる奴は機体チェックにかかるぞ！」

「ういっす！」

グラスの指示で作業にかかる整備員たち。

作業員に誘導され、ティエレは整備架台のひとつに背を向けて収まる。

「かー、こりやまたごっつい騎兵ですな。あきれることに大砲背負ってますぜ」

「あまり見ない型の騎兵だな。しかも相当いじってやがる。こいつを仕上げた奴はかなりのタマだぜ。騎手の腕も悪かねえ」

重装甲でありながら、それを感じさせない騎兵の滑らかな動きにグラスは感嘆した。その出来栄えに内心舌を巻く。

機体チェックは仕事を請けても騎兵に問題がないか調べる為に行う。

なにせ、荒事が多い冒険者の中でもとくに荒っぽい仕事を請け負うのが騎兵乗りだ。当然危険度も高い。騎兵持ちが請ける仕事はギルドの依頼の中でも重要な案件のものが多く、その成否はギルドの評判だけでなく経営にも直結する。

半端な状態の騎兵で依頼に失敗でもされれば、ギルドとしても困る訳だ。

騎手はギルド内で定期的に機体チェックを受けねばならず、支障なしのサインを整備班から貰わなければギルドからの依頼を受けら

れなくなってしまう。

ギルドにとつても騎兵持ちの冒険者にとつても、機体チェックの安否は重要だった。

ざわり・・・

作業に取り掛かろうとした整備員たちの動きが止まる。本来喧騒が絶えないはずの整備部ハンガー棟が静寂に包まれる。

操縦席からクリスが現れたせいだ。さすがのグラスも啞然とする。

「・・・おいおい。こいつはなんの冗談だ？」

「班長。なんかやたらちみつこくて可愛い女の子が降りてきた幻が見えるんですけど・・・」

「そりゃ、俺にも見えてるから夢でも幻でもないやな」

いまだ呆然としている若い整備員の背を叩き、正気に戻すと作業にかからせた。作業にかかる整備員の脇を抜けてクリスがグラスの元にやってきた。行儀良くぺこりとお辞儀して彼女は言った。

「失礼ですが、班長のグラスさんですか？ 始めまして。私はクリスティナと申します」

やたらと丁寧に挨拶され、笑みを浮かべるグラス。ふたりの様子は、並んで立てば祖父と孫といったところだろう。

「整備班班長ステファン・グラスだ。ここの整備班を仕切っている。決まりだから嬢ちゃん騎兵、ちつと調べさせてもらうぜ」

「はい。お手やわらなに」

「簡単なチェックだけだから一時間もあれば終わる。コーヒーでもどうだい？」

「良いですね。頂きます」

作業場の隅に設置してあるテーブルと簡易イスだけの休息スペースにクリスを誘うと、自分用も含めてコーヒーを二つ用意した。片方をクリスに渡す。

「ところで嬢ちゃんの騎兵、見ない型だが何処のか聞いてもいいかい？」

「あれはティエレをベースに改造した機体です。趣味の赴くままにいろいろ弄っていたらあまりました」

「ちよつとまで。じゃあ、なにか？ あれを組んだのは嬢ちゃんだったのかい！？ ティエレと言うと、西方の自動兵器にやられて滅ぼされた国が製造していた機体だと思ったが・・・」

「騎兵弄りは趣味ですので（あらら、あそこ滅んでいたのね。ティエレの予備パーツそろえるの苦労しそうだなあ）」

「趣味で組めるような機体じゃないような気がするが」

「ならば愛と言い換えましょう！」

胸を張って答えるクリス。

小柄な体躯からは想像もできない豊かな胸が押し上げられる。

（若え連中には目の毒だな・・・）

胸を張るクリスに苦笑し、コーヒーを一口する。

いつも飲んでいるコーヒーが、今日に限って複雑な味がしたグラスである。

第06話 私は冒険者として歩み始めた、とか言ってみる（後書き）

H23/10/04 誤字・文章一部修正。 ついでに騎兵持ち冒険者の数も変更。

第07話 初仕事はやっぱりゴブリン退治から（前書き）

PV2万、ユニーク3500、お気に入り登録80件突破しました！
ドンドン、パフパフー！

読んでくれた皆様、ありがとうございます！

第07話 初仕事はやっぱりゴブリン退治から

カーテンの隙間から差し込む優しい朝日が、暗い部屋にほのかな明かりを燈す。

目覚めた小鳥が囀る声と、朝の早い労働者と彼らに朝食を振舞う屋台の主の声が微かに遠くから聞こえてきた。朝霧に包まれたラスカーシャの街を朝の陽光が洗い流していく。

差し込む朝日に眠りを破られたクリスは、清潔なシーツに包まれたままベッドの上で身じろぎをした

「……ん」

少女の甘い声が室内を満たす。

ベッドの上で半身を起こすと眠気を振り払うように大きな伸びをした。

「んー」

クリスは男物のシャツ一枚と言うあらもない姿だった。下着も身に着けていない。差し込んだ朝日が少女の身体を照らし、シャツの下艶やかな肢体をくつきりと透かして浮かび拳がらせていた。いまだ眠気の抜けきらぬ目を擦り小さくあくびをする。

久しぶりのベッドでの睡眠は快適だった。お日様の香りがするシーツも清潔で、よく眠ることができた。

「アーサーさん達と一緒にのときはキャンピングカー出せなかったし、久しぶりにベッドで寝れると熟睡できたなあー」

冒険者ギルドでの登録も終わり、晴れて冒険者となった昨日。

クリスは予てからの懸念事項である「世界は何故このようになつてしまったのか」を調べるため、ギルド資料室にこもつて本や資料を読みまくつた。

八十年前に突如として自動兵器が人間に牙を剥いたこと。そのため多くの国や街が焼かれ、犠牲者がたくさん出たこと。自動兵器に押され、人類の生存圏が海岸から200キロほどの細長い帯状の地域に限定されていること。『蟲』の大侵攻で自動兵器の侵攻が止まつたことなどを知ることができた。

時間を忘れるほど熱心に調べていたら、知らぬ間に日が暮れてしまつていた。ティエレはそのまま整備部に預け（有料で預かつてくれる）、ギルドの受付で女の子の一人旅でも安心して泊まれる宿屋を紹介してもらつたのだ。

ギルドと提携を結んでいるこの宿屋は少々値段は張るが、その分セキュリティが充実している。見かけ十三歳のクリスにも驚いた顔は見せず、ギルドカードの提示を求められたものの部屋を取ることができた。

なによりクリスを喜ばせたのは、宿屋に浴場があつたことだろう。元は入浴の習慣のある風呂大好き日本人なのだ。早速湯船に浸かり、旅の疲れを落とした。

入浴には早い時間だったのか、浴場はクリス以外見当たらず、十人は同時に浸かれるお湯たつぷりの浴槽を独占できて上機嫌だ。

夕食も上等で、港町なので魚介類が豊富なのは当然だが養豚業も盛んなのか、シーフード以外に豚肉を使った料理が出てきた。どれも美味しく頂いたクリスである。

その夜は早めにベッドに入り就寝。現在に至るといわけだ。

カーテンを開き、壁に背を預け窓から朝霧の抜け切らぬ街の外観を眺める。

ラスカーシャの街。冒険者の街。そして、今日からクリスがかきそめの宿とする街。

しばらくそうして窓の外を眺め、やおら身を翻して身支度を始める。いつものパンツァージャケットにスカートという衣装に身を包むと、アイテムボックスから洗面器を取り出した。魔術で湯を造り顔を洗う。

洗顔で眠気を完全にはらい、壁にかけてある時計に視線を移した。まだ朝食にはしばらく時間がある。

ベッドに歩み寄り枕の下に隠してあった銃を取り出す。ゲーム時代から愛用している魔動銃だ。

旧ドイツ軍のモーゼル・シュネルファイヤーM1932にそっくりの魔動銃をテーブルに置き、ウェポンボックスから予備銃を取り出し傍らに置くと分解清掃を始めた。

ちなみに予備銃を出したのは、不測の事態が発生した場合、即座に対応できるようにするためだ。地球時代の映画で見て、やたら力ツコよかったので真似しているのである。

形式美に拘るクリスであった。

戦車といい衣装といい銃といい、旧ドイツ軍風にまとめているクリスはミリタリーオタクでもあった。ジャケットの下がスカートなところは目を瞑って頂きたい。

クリスのモーゼル魔動銃は実包と魔動術併用型だ。

ゲーム時代の実包は単なる趣味装備だったが、こちら側での現在においては実用品。AMF影響内では魔法は使えず、近年有効視されているのが火薬式の実弾武器なのだ。

「やっぱり銃は実弾じゃなきゃねー。銃で魔法をびこびこ撃つって、

悪くはないんだけどなんか違うし」

銃の整備でほどよく時間をつぶすと朝食の時間になった。

予備の銃をウェポンボックスにしまい、代わりに白兵戦用の小太刀と20センチほどの棒を取り出し腰に差す。ちなみに棒は右腰だ。整備の終わった銃をホルスターに戻し、士官用野戦帽をかぶると準備完了。

部屋を後にして一階の食堂に向かった。

「あら、おはよう。昨日はよく眠れた？」

「おはようございます。おかげさまで、ゆっくり休むことができました」

ぺこりと行儀よく朝の挨拶をするクリス。

食堂に入ったクリスを迎えたのは、宿の女主人ミリアムだ。

二十代後半の綺麗というよりは可愛いといった印象で、小春日和のようなぽかぽかした雰囲気的女性だ。これで元冒険者というから驚く。夫のジークも元冒険者で、ミリアムとは同じ仲間だった。そのジークは今は厨房を取り仕切っている。

“ここ”春の日の草原亭”は、冒険者ギルドでクリスの登録作業をしてくれた事務員シンシアの実家で、女主人ミリアムは姉だという。実家は姉夫婦が継いだが、少しでもその手伝いができればと宿泊先を探している冒険者を斡旋していた。むろん問題を起こしそうな冒険者を選別して。

その甲斐あってか宿は繁盛していた。宿泊客の半分は冒険者で、しかも長期宿泊が多い。

「朝食を持ってくるから、好きなところに座っててね」

「ありがとうございます」

宿泊費には朝食代も含まれている。昼と夜の食事は別料金だ。夜も食堂は空いていて、宿泊客以外に街の人たちも食事や酒を目当てにやってくる。

食堂は六人がけのテーブルが三卓と四人がけが四卓、カウンターに席が八つある。食堂のスペースの割りにテーブル数が少ないのは、客にゆつくりと食事を楽しんでもらいたいという宿の配慮だろう。テーブルは冒険者らと旅人や商人らしき人達でほとんど埋まっている。クリスはカウンターの空いている席に腰を下ろした。野戦帽を傍らに置く。

「おまちどうさま。ごゆつくりどうぞ」

ミリアムが朝食を運んできた。カウンター越しにクリスの前におく。

メニューは野菜たっぷりのシチューにスクランブルエッグ、焼きソーセージ二本と付け合せの野菜、トースト二枚と軽いワインだ。朝食のわりに量が多いが、それは宿泊客の多くが冒険者だからだろう。身体が資本の冒険者は朝からガッツリ食べる。

無論クリスも残さず食べる。だが、その様子はどこか小動物の食事風景を連想させ、見る者の心に暖かな何かを沸きおこさせる。

「おいしい？」

「はいっ。とつても！」

「それはよかった」

ほほを染め、本当に美味しそうに笑顔で食事をするクリスに声をかけるミリアム。クリスの笑顔につられ、ミリアムにも笑顔が浮かんだ。互いに微笑みあう。

そこに一種独特の雰囲気包まれた空間が出来上がっていた。食

事途中の他の客は思わず手を止め、その微笑ましい空間に見入っている。

「そういえば、クリスちゃんは今日からお仕事ですって？」

「はい。昨日登録を終えたので、今日からになりますね」

登録を終えた後の時間は資料漁りに費やしていた。

そういえば仕事内容について調べるのを忘れていたつけと述懐するクリスであった。

「クリスちゃんなら大丈夫だと思うけど、冒険者って危険なお仕事だから充分気をつけてね」

「ありがとうございます。ご忠告、忘れません」

ワインを飲み干し、食事を終えたクリスは席を立つ。

士官用野戦帽をかぶりなおしてミリアムに礼を述べた。

「ごちそうさまでした。それで行って来ます」

「はい。おそまつさまでした。お仕事がんばってね」

会釈をして去って行くクリスに、ミリアムは手を振って送り出す。その様子を見ていた冒険者らしきグループが、ミリアムに苦言を呈した。

「いいのかい。あのちっこいの一人で行かせてさ。ミリアムらしくない」

「そうだよ。せめてどっかの冒険者グループに紹介でもしてやんないと。あの娘、すぐ死んじゃうよ？」

クリスの幼さい容姿に父性愛を刺激されたか、冒険者達の言葉に

は少々険がこもっている。

ミリアムはクスリと笑うと答えた。

「大丈夫よ。あの娘、私なんかじゃ歯が立たないくらい強いから。むしろ、他の人は足手まといにしかないわね」

ミリアムのあっけらかんとした言いように息を呑む冒険者達。

ミリアムとその主人ジークは、ふたりが結婚して引退するまではこの街でもトップクラスの冒険者だった。そのミリアムが歯が立たない？ あのちっこいのに？ 冗談だろ？ とでも言わんばかりに、冒険者だけでなくじみの宿泊客らも驚いていた。

宿を出て大通りを目指すクリス。

春の日の草原亭は、冒険者ギルドから街の中央へ向かう大通りから一本内側に入った通りにある。そのため初見の客は少なく馴染みの客がほとんどだ。

冒険者相手の商売のため宿泊料は他の宿屋より高めだが、値段の割りに美味くて量の多い料理が評判を呼び隠れた名店として繁盛している。

料理と酒を目当てにやって来る街の人や冒険者も多い。

「やー、いいところ紹介してもらったなー。食事も美味しいし、シーツも清潔でいい匂いがしたし。受付のお姉さんにお礼を言っておかないと」

朗らかな笑みで元気よく歩くクリスに道行く人々の微笑ましい視

線が集まる。ふつうクリスのような少女が腰に剣やら銃やらを差していれば驚くものだが、まるで見えていないかのように無視されていた。

途中、露店の屋台などを冷やかしながらギルドに着いた。壁の外のギルドではなく、内側の車両を持たない冒険者達用のギルドだ。

突如現れたちみつこい少女に驚きを隠せない冒険者達。彼らを気にすることなくクリスは衝立の依頼書をチェックして回った。

クリスが特定の依頼表のところを熱心に読みふけているのを見て、ああなるほどと納得する

（護衛依頼に討伐依頼。あ、ゴブリン退治がある。やっぱりファンタジー世界だなー。ゲーム初期の頃が懐かしいや。こっちは失せ物探しに行方不明者搜索？ 荷物の配達に工事現場の人夫募集って・
・これって冒険者の仕事なのかな？）

冒険者ギルドは早い話が職業斡旋所だ。

仕事を探している者と仕事をして欲しい者とを結びつける場所だ。したがって、仕事をして欲しい者が、剣や銃を必要とする仕事ばかりを持つてくるとは限らない。

技術者や主計などの専門知識を必要とする業務を除き、簡単な家事手伝いや失せもの探し、人足募集などの日雇い労働者を求める依頼もギルドに舞込んでくる。そういつた仕事を求めてギルドに顔を出す街の住人もいる。むろん、誰でも仕事をもらえるという訳にはいかない。

ギルドを通す以上、登録してある者でなければギルドの仕事は請けられない。そのため日雇い労働を探している者を一般登録者として登録し、その手の仕事を斡旋していた。

逆はだめだが冒険者としてギルドに登録してある者も、そういつ

た日雇い仕事を請けることができる。

ほとんどの冒険者は一攫千金を求め危険だが高額の依頼に目が向きがちで、そうした街の依頼を受けようとする冒険者は少ない。溜まっていく街の住人からの依頼の処理に頭を悩ませたギルド上層部が、苦肉の策として始めたのが一般登録者制度だった。

クリスが熱心に目を通してるのが一般依頼書を張り出している衝立で、その場にいた冒険者達は日雇い仕事を探しに来た一般登録者だと思っただろう。

幼く愛らしい少女が、機甲騎兵を乗り回す冒険者だとは想像だにしない。

なので、クリスが一般依頼所の衝立を通り過ぎ、冒険者用衝立から依頼書を引き剥がして受付に持っていくのを見た冒険者達は再びぎよつとした。

「この依頼を受けたいのですが」

「はい。依頼の受注ですね。えー・・・えー・・・ゴブリン退治？」

受付の事務員も、まさか目の前の愛くるしい少女が冒険者用依頼書を持つてくるとは思わなかったのだろう。依頼内容が書かれている依頼書とクリスの顔を何度も見返している。

「お嬢ちゃんが冒険者の仕事を？」

「はい。ギルドには昨日冒険者として登録しました。問題ないはずですが」

そう言つてギルドカードを差し出す。

ギルドカードに記入された内容を確認し、息を呑む事務員。

「機甲騎兵・・・お持ちなんですか？ 機甲騎兵持ちの冒険者がな

ぜにゴ布林退治を？ ふつつ自動兵器相手の仕事を選ぶのでは？」

目の前の幼い少女が機甲騎兵を持っていると聞いてざわめく冒険者達。それも当然だ。この壁の内側のギルドは、機甲騎兵はおるか戦闘車両すら持っていない冒険者用のギルドなのだから。

「冒険者のスタートはゴ布林退治と相場が決まっています。

基本中の基本です。基本は大事です。

冒険者と言えばゴ布林退治。ゴ布林退治といえば冒険者。ゴ布林退治は冒険者のスタートであると同時にステータスでもあります。ですので、私はこの依頼を受けたいのです」

握り拳で力説するクリス。

なにかが盛大に間違っているような気がするが、やたら自信たっぷりに言い切るクリスに異論を差し挟める者はこの場にいなかった。

本来ならゴ布林退治は駆け出しの冒険者の仕事だ。

ゴ布林は単体ではそれほど脅威ではない。戦いの経験のない街の人ならともかく、武器を扱える冒険者ならよほどの数でも出ない限り負けることはないだろう。

だが、間違っても機甲騎兵持ちの冒険者が選ぶ仕事ではない。なぜなら騎兵持ちの冒険者はほとんどの場合が熟練者だからだ。

熟練者が駆け出し用の仕事を奪うことをギルドは嫌っている。駆け出し冒険者の成長の機会を奪うことになるし、熟練者が高額依頼をこなす事でギルドには多額の仲介料入る。熟練者にはそれに相応しい仕事を請けギルドを潤してもらいたいと言いつのがギルドの本音だった。

だがしかし。

いかに騎兵持ちとはいえ、クリスは熟練者には見えなかった。だ

れが十代前半にしか見えない少女を熟練の冒険者だと思おうか。実のところ、大陸一と言っても過言ではない実力の持ち主なのだが、そのことを知るものはこの場にはいない。

したがってギルドが下した判定は、クリスは騎兵を持つてはいるが冒険者としては駆け出し、ということになる。

騎兵があれば、ゴブリンに遅れを取ることもないだろうとも判断された。それに、必要ならたとえゴブリン退治といえど騎兵持ちの冒険者を斡旋するというギルドの宣伝にもなる。

ギルドにとっても悪い話ではない。というかスケベ心である。

一方、冷水を浴びせられた形なのがその場にいた冒険者達だ。

騎兵持ちの冒険者がゴブリン退治を請け負う。自分達が彼女の立場なら同じ行動を取れるだろうか？ 騎兵があるなら、より高額な報酬と名声を求めてゴブリン退治など見向きもしないだろう。ただでさえ良い装備や車両を手に入れるために高額の依頼ばかりを探していた。

翻って彼女はどうか。機甲騎兵という最高のステータスを持ちながら、基本は大事と驕ることなくゴブリン退治を進んで請け負う。

心構えの差に慄然とし、多くの者は恥じ入ってしまった。

中には反発を覚える者もいたが、クリスの取った行動はおおむね好意的に受け止められた。その後、たとえ報酬は安く地味であろうと堅実な仕事を選ぶ冒険者が増え、ギルド上層部を驚かせたと言う。

職員から差しだされた依頼書を受け取り、クリスは満面の笑みを浮かべた。

ほほを染め、うれしさでこぼれるような笑顔だ。なにせ初仕事だ。

依頼書を胸に抱きしめ事務員に礼を言う。

「お仕事、がんばってくださいね」

事務員も釣られて笑顔でクリスを送り出した。

（ひゃっほう！ 初仕事だー。やっぱり最初はゴブリン退治じゃないと、曲がりなりにもファンタジー世界にきた意味ないよね。ほとんどのファンタジーRPGでも最初の相手はゴブリンだし）

あの場にいた冒険者達が聞けば感動を返せと声を荒げていただろうが、あいにく心の声なので誰にも聞こえることはない。

連絡用通路を通り、壁の外のギルドへと向かう。途中、事務所に立ち寄り受付のシンシアにお礼を述べ、ついでにミリアムに三・四日帰れないと伝言を頼んだ。

少しの雑談の後、ティエレを預けてある整備部棟へと進む。

「おはようございます。グラスさん、整備班の皆さん」

「よう、嬢ちゃん。来たかい」

「クリスちゃん、おはよー」

礼儀正しく愛想の良いクリスは、すでに整備班の中でも人気者でマスコットと化している。

騎兵談義に花が咲いたグラスともすでにマブダチだ。

「今日から早速仕事かい？」

「はい。先ほど仕事を受注してきました。ラルカ村でゴブリン退治です」

「ゴブリン退治とはこりやまた。嬢ちゃんなら自動兵器相手でもすぐトップに立てるだろうに」

「なにをおっしゃいます。ゴブリン退治は冒険者として避けて通ることはできない登竜門です。私、がんばりますよ?」

両手で握り拳をして、やる気を見せる少女を見て笑う。

高額報酬の仕事を探してばかりの若い冒険者達に、思うところのあるグラスであった。

「そりゃあ、いい。嬢ちゃんの意気込み、若え冒険者連中に聞かせてやりてえな。がんばりな、嬢ちゃん」

「はい。がんばります」

整備員一同に見送られ、クリスは冒険者ギルドを後にした。

目的地のラルク村は、ラスカーシャから西に徒歩で一日ほどの山間にある小さな村だ。

場所は謎地図で確認してあるので迷うことはない。途中の山道には傾斜のきつい場所もあったが、機甲騎兵での道程には問題にすらならなかった。

山道に行くこと数時間。午後三時を回った頃、山間にぽつぽつと建つ家々が見えてきた。個数は約三十軒ほどの本当に小さな村だ。段々畑の合間合間に家が建っている。なんとなく日本の山奥にある山村を思いおこすクリスである。

近づく騎兵の姿に驚いた農作業中の村人数人が、あわてて村に駆け戻っていった。機甲騎兵の姿などめったに見たことのない村人だ。野盗か何かと勘違いされたのかもしれない。

仰々しくなる前に誤解を解いていたほうがいいかと村の手前で止まり、クリスは騎兵から降りた。

しばらくティエレの足元で待っていると、村の方向から七人ほどの村人がやってきた。先頭を歩くのは年のころ六十過ぎの年配の男性だ。

クリスの姿を視界に納めた村人たち間に、戸惑いの表情が浮かぶ。先頭の男性が口を開いた。

「・・・お嬢さん、この村になんの用だね？」

「失礼ですが、貴方は？」

「わしはこの村の村長でダルクという者だ」

「ああ、これは失礼しました。私は冒険者のクリステイナ。こちらの村がギルドに依頼したゴブリン退治を請け負った者です」

礼儀正しくお辞儀をするクリス。

村長のダリスは無言で見ているだけだが、周りの村人の反応は端的だった。失望の色を隠すどころか怒りだす者もいる。

当然といえば当然の反応だ。村の死活問題の解決に、けっして安くはない金を出して依頼したのだ。なのに、やって来たのが幼い少女一人とあっては憤るのも仕方がない。

「冒険者？　こんなお嬢ちゃんか？」

「おいおい。冒険者ギルドはなに考えてこんな嬢ちゃんよこしたんだ？」

「（当然の反応だなー。でも、ここで引く訳にはいかないのよね）たしかに私の見かけはこんなのです。しかし私はこの機甲騎兵を操ることができます。それでもまだご不満ですか？」

傍らのティエレの鋼鉄の脚をぺぱんぺぱんと叩きながら、クリスは昂然と村人たちを見渡した。

さすがに重装甲機甲騎兵の威光はすさまじい。村人達は互いに視線を交し合った。ちまっこいクリスはともかく、鋼の巨人はいかにも頼もしく見える。だいいちゴブリン退治に機甲騎兵を持ち出す冒険者などいない。

ダルクはクリスをじっと見つめ、口を開いた。

「・・・いいだろう。たしかに強そうだ。こちらに来なさい。わしの家に案内しよう」

身を翻したダルクに案内され村に入る。すれ違う村人たちの視線は困惑していた。

村の集会場を兼ねる村長ダルクの家は、ほかの村人の家よりも大きく部屋数も多い。通された部屋は二十畳ほどの広さだった。

テーブルを挟んでダルクと向き合って座った。

「大まかな話はギルドから聞いている思うが、またこの村の付近でゴブリンどもの姿が目撃されている。村人に被害はないが、村はずれの畑が荒らされたこともあった。このままではいつ襲われるかわからんと、村の連中も心配しておるんだ」

「さきほど、またとおっしゃいましたけど？」

「実は十年ほど前にも同じようなことがあった。そのときもギルドに依頼して退治してもらっておる」

「なるほど。あとでゴブリンの姿を目撃した村人を集めてもらえます？ ゴブリンの数や巣を作っているなら大まかな場所を特定したいので」

「それなら、もう用意してある」

ダルクは立ち上がると、壁際の戸棚から紙の束を引っ張り出しクリスの前に広げた。この村周辺の地図だ。地図には所々バツ印が記入されている。印の横には数字が記入してあった。その時目撃した

ゴブリンの数だ。

バツ印は村の北西方向の森に集中していた。

「ずいぶん手回しがいいですね」

「前にもあったと言ったじゃろ？ 前の冒険者にも同じことを聞かれたからの。今回は予めわしが聞いて地図に印をしておいたのじゃよ」

「なるほど」

クリスはやおら立ち上がり、窓辺へと向かう。

なにをするのかといぶかしむ村人の視線をよそに、開けた窓の外に両手を差し出し魔術【探索バード】を使用した。

手の中に光が生まれ、その光の玉の中から十数羽の鳩が飛び出し森の方角へ飛び去っていく。突然のことに驚く村人たちの中で、村長だけが目を細め、「ほう」と小さく呟いた。

飛び去る鳩たちの姿をしばらく眺め、クリスは再び着席して村長に向きなおった。

「では、この辺の森に詳しい人を紹介して頂けますか？ あとゴブリンの姿を見た人から直接話を伺いたいのですが」

「それならそのケインに聞くがいい。ケインは猟師をしておって森に詳しい。ゴブリンを最初に見つけたのもケインじゃ」

部屋の隅のざわめく村人たちに視線を向けると、輪の中から体格のいい若い男が進み出る。

早速、話を聞くクリス。

「最初に見たのは十日ほど前。森で猟をしていたとき偶然見かけたんだ。とっさに隠れたから連中には見つからなかったと思う。それで急いで村に知らせに戻った」

「ケインから話を聞いたあと、わしらはやれることをしたよ。と、いっても小さな村じゃ。出来ることはたかがしれておるがの。森との境に柵を作ったり、夜中に村の見回りをしたりじゃ」

「ひよっとして戦わせたんですか？」

「まさか。村の者は戦いなどできやせん。見回り組みには、銅鑼や太鼓を持たせて見つけたら騒いで知らせると言い含めてある。けして戦おうとするなとな」

「賢明な判断ですね」

ゴブリンは魔物の中では最弱の部類に入るが、それでも戦闘経験のない村人が相手をするには難しい。まして相手は群れで行動し、勝てるとみた相手には容赦なく襲いかかる。残虐にもなる。

村人に被害がなかったのは村長の賢明な判断の賜物だろう。

地図を見ながらケインに話を聞き、村長とも話をつめていく。

といっても大したことを話す訳ではない。今晚中に片をつけるので、クリスが森に入っているあいだ、村の守りを厚くしてほしいと話しただけだった。

「今晚中に片をつけるじゃと!? おぬし正気か？」

さすがにダルクは驚いた。

当然だ。夜は魔物の活動が盛んになる時間帯。ゴブリンも夜行性でおまけに夜目も効く。普通の冒険者なら昼のあいだに倒しに行くのがセオリーなのだから。

だがここに、魔物以上に夜との相性がよい者がいた。クリスにはつこりと笑い告げる。

「私は吸血鬼族ですから、昼間より夜のほうが動きやすいんです」

「吸血鬼族じゃと!？」

「・・・念のため言っておきますが、吸血鬼族は別に血を吸ったり

しませんよ？ アンデットでもありませんからね。

そこっ！ 露骨に怖がらない！」

あからさまに怯える村人Aを指差してクリスが言った。

人の多い大都会でもめつたに見かけることのない引きこもりが吸血鬼族だ。レア種族

夜の女神イシュベルデの祝福を受け、変化した者が吸血鬼の始まりとされるれっきとした知的種族なのだ。

であるのに関わらず、なぜか吸血鬼などと言うモンスターチックな種族名で呼ばれていた。理由はクリスも知らない。

その理由は初代吸血鬼、真祖クリストファーに原因がある。

この男、無類の女好きにしてうなじ愛好家だった。

気に入った女性のうなじにキスマークを付けるのが趣味の変態であつた。それはもうえらい勢いでキスマークをつけて回っていた。

うなじにキスをする仕草が首筋から血を吸う鬼のように見え、ついたあだ名が吸血鬼へんたいである。やがて吸血鬼という名前のみが残り種族の名として定着してしまった。

世の吸血鬼族が聞けば全力で真祖を呪い殺しそうな事実だが、幸か不幸かいまとなつては真相を知る者は女神だけである。

ラスカーシャほどの大都会であれば話は別だが、ラスク村の様な田舎では魔物の一種として偏見の目で見られたりする。

クリスを役に立つか分からない小娘と侮り、敵意を向けていた村人達も今は恐怖で引きつっていた。村長だけは驚きはしたものの落ち着いている。そこに偏見の目はない。

「わしは若い頃、街で暮らしておったからの。吸血鬼族も人族やエルフ族同様、人類であることを知っておるよ。若い者達の無頼な態

度は許してやって欲しい」

「いきなり吸血鬼族といわれて驚くのは解りますから、別に怒ってはいません。そんな訳でして、全力を出せる夜のうちに片付けてしまおうと思うのです」

「夜の闇が不利にならない吸血鬼族らしい理由じゃの。夜動く理由はわかったが、ゴブリンどもの居場所は解っておるのかの。 - - ああ、さっきの鳩か。あれはお前さんの「目」じゃな？」

「その通りです。あれは私が魔術で作った【探索バード】。あらかじめゴブリンのいそうな場所をチェックして頂けたので探し出すのは楽でした。この村から北西2キロにある洞窟が連中の巢のようです。数は確認できただけで七匹でした。洞窟の中にはまだいそうですが」

「思っていたよりも多そうじゃの・・・」

「一度にすべて相手するつもりはないので大丈夫です。ちょうどこちらに五匹ほど向かって来ていますので、そちらを叩いたあと巢のほうを殲滅します」

椅子を立つと野戦帽をかぶり告げるクリス。

もうすぐ夕暮れだ。先行するゴブリン一行と邂逅するころには日は沈み、奇襲をかけるにはちょうどいい。

その顔には恐れはなく自信だけが浮かんでいた。

「万が一にもないとは思いますが、撃ち洩らしがあるといけませんので、今夜だけは村の守りは厳重にお願いします。【探索バード】は残しておきますので、なにかあったら呼んでください。文字通り飛んできますから」

「わかった。改めてよろしく願います」

ダルクが手を差し伸べてきた。

その手を取り握手する。思ったよりもがっしりとした手だ。農作

業にあけくれる村人にしては少々違和感があるとクリスは感じた。

鬱蒼とした森に入り四時間あまり。

途中すれ違ったゴブリン五匹をさくつと片付けたクリスは、ゴブリンの巣らしき洞窟の近くまで来ていた。

日はすでに落ち、夜空はほとんど雲に覆われ星の光のない森は真の闇に沈んでいる。吸血鬼族のクリスにはまったく意味はないが。

ティエレは村に置いてきた。夜は思ったより音が伝わる。機甲騎兵で近づけば、気づいたゴブリンが逃げてしまう恐れがあった。ゴブリンは元来臆病な魔物だ。逃げるのは早い。

今夜中に仕事を終わらせたいクリスは禍根を断つためにも一匹も逃さない構えだ。

「さてさて。どうしましょう」

樹木の陰に身を隠し洞窟を監視を続けるクリス。

【探索バード】で見張っていたためゴブリンたちの動向は把握している。森をうろついていたゴブリンと最初の五匹をあわせ、すでに八匹のゴブリンを倒していた。

残りは二・三匹だろうと当たりをつけている。

「群れごと移動して来たにしては数が少ないし、巢分けで追い出された連中が南下してきたって所かなー。面倒だし、こっちから出ますか」

パッシブスキル【危険感知】が働いていることを確認し、クリス

は樹木の陰から洞窟へと音も立てず移動した。入り口の真正面は避け、岩肌に沿って移動する。

適度な岩陰に隠れて銃を抜き、撃鉄を起こしてから途中拾っていた木の棒を洞窟へと投げ込んだ。木の棒が岩壁にぶつかり大きな音を立てる。

待つことしばし。

中からのっそりと姿を現したものがあつた。ゴブリンと似ているが一回り大きな体軀をしている。ホブゴブリンだ。

（用心棒の先生かな？ まあ、いいや）

洞窟の入り口近くで周囲を警戒しているホブゴブリンめがけ、モ―ゼルを三連射。頭と胸を撃ちぬかれたホブゴブリンはドウツと地面に倒れた。完全に絶命している。

突如起こった轟音と倒れた仲間に慌てたか、中からホブゴブリンがもう一匹現れる。手には程度のよさげな剣を握っている。

慌てることなく照準を合わせ、再び三連射。先のホブゴブリンと同様の運命をたどった。

油断なくモ―ゼルを構え岩陰から身を乗り出し、じりじりと洞窟の入り口に近づいてく。懐から取り出した鏡を使って洞窟内を確認。呆然と突っ立ったままのゴブリンを二匹発見した。

（思ったより多かったけど、これでお終い！）

洞窟の入り口に飛び出し、二匹のゴブリン目掛け発砲しようとしたところで突如脳内に警報が鳴り響いた。咄嗟に身をかわし、地面を転がって洞窟の外に飛びのいた。

転がるクリスを追うよう飛来した火線が地面を焦がしていく。

「ゴブゴブー！」

地面を転がりながら火線の元を視線で追うと、そこには両手で持った棒を構える奇妙なゴブリンの姿があった。身体 of 各所に鳥の羽であしらったアクセサリーを身に着けている。

知能に優れ、精霊術を使いこなすゴブリン種。ゴブリンシャーマンだ。

何処からか手に入れた魔動銃を持っている。

そのゴブリンシャーマンは呆けているゴブリンを蹴り飛ばし、クリスを追うよう命じる。我に返ったゴブリンは慌ててクリスを追った。

「よっ！ はっ！ たっ！」

火線は執拗に追ってくる。

地面を転がりながら奇妙なダンスを踊り襲いくる火線から身をかわすという器用なマネをしつつ、転げながら洞窟を離れるクリス。

「ちよつとー！ ゴブリンシャーマンなら魔法使いなさいよ、魔法を！ 魔動銃なんて自身のアイデンティティを放棄するなー！」

厳密に言えば、魔動銃とて飛び出るのは魔法だ。魔法を撃つ銃が魔動銃なのだ。第一、ゴブリンシャーマンも、術師でありながら剣やら銃やら使うクリスに言われたくなかつた。

「この！ いい加減にしなさい！」

火線の援護を受けてクリスを追う二匹のゴブリンと銃を撃つゴブリンシャーマン目掛け、残り全弾叩き込む。ゴブリンの内一匹は仕留めたものの、二匹目は腕を貫いたのみだった。それでも衝撃で地面に倒れる。

一方、ゴブリンシャーマンにはかすりもしていない。

「ミスった！」

洞窟から出てきたゴブリンシャーマンと視線が合う。

クリスは撃ちつくしたモーゼルを投げ捨て、腰の小太刀と20センチほどの棒を引き抜く。ゴブリンシャーマンとの距離は約10メートル。魔物は勝利を確信し、嫌らしい笑みを浮かべた。

「舐めるな！」

剣士スキル【クイックムーブ】を使用。10メートルの距離を瞬時につめるクリス。突如目前に現れた人間の小娘に驚き、ゴブリンシャーマンは引き金を引く。

同時にクリスの右手が一閃。魔力を光の刃に変えるライトサーベルが火線そのものを蒸発させる。

続く逆手に構えた左手の小太刀でとどめを刺そうと一閃――しよ
うとして、クリスの動きはそこで止まった。

「おりよ？」

間の抜けた声が夜のしじまに木霊する。

ゴブリンシャーマンは白目をむいていた。

脱力した手から魔動銃が零れ落ちる。落ちた銃を追うように、ゴブリンシャーマンも地面に倒れた。なにやらぴくぴくと痙攣している。

「おりよ？」

「ゴブ？」

「なにが起きたの？」とでも言いたげなゴブリンが、小首を傾げクリスを見た。

クリスにも分けが解らず小首を傾げて考え込む。やがてピンと閃き、やおらポンと手を打った。

「ああ、魔力^{MP}切れ！」

「ゴブ？」

魔動銃は魔法を撃つ銃だ。当然ながら銃を撃てば（魔法を使えば）術者の精神力を消費する。

クリスを追ってバカス力銃を撃ったため、ゴブリンシャーマンは魔力^{MP}を使い切ってしまったのだった。旧式の魔動銃ではよくある事故である。

最新型ではその欠点を補う為、魔力を封じたカートリッジ式の魔法弾^{MP}を使用し魔力切れを防止している。

「ゴブゴブ」

「理由がわかったなら説明してよ」とでも言いたげに、クリスの裾を引っ張るゴブリン。

「ん？ ああ、だからね。魔動銃とはいえ撃つのは魔法なんだから、ゴブリンシャーマンは魔法を使いすぎて魔力が無くなって気絶しちゃったんだよ」

「ゴブゴブ。ゴブー！」

「馬っ鹿でー」とでも言いたげに、気絶したゴブリンシャーマンを指差して笑うゴブリン。ひょっとしたら嫌われていたのかもしれない。

クリスもつられて笑ってしまった。

「あはは！」

「ゴブブー！」

ひとしきり笑ったあと、突如として我に返るクリスとゴブリン。

「はわわっ！」

「ゴブー！」

思いのほか近距離にいた魔物に驚き、クリスは左手を一閃。ゴブリンの首を切り落とした。

第07話 初仕事はやっぱりゴブリン退治から（後書き）

H23/10/04 文章一部修正。誤字修正。

第08話 ギルドからの依頼（前書き）

アクセス数の跳ね上がりには、小心者の私の心臓は爆発寸前です。
プレッシャーに負けて、今回短め・・・
でも、読んでくださりありがとうございます。

第08話 ギルドからの依頼

MMORPG『パンツァー・リート』は陸戦を主としたゲームだ。機甲騎兵や戦車などの装甲戦闘車両、車やバイク、はては騎乗動物を乗りこなし戦闘や狩りを楽しむ。

ゲームデザイナーに拘りがあるのか、陸上手段は充実しているが航空に関しては驚くほど手段が少ない。

プレイヤーからは機甲騎兵で空を飛びたいと言つ意見が多数寄せられたが、運営からは断固拒否されていた。

いわく、

「陸戦兵器は陸を往くからこそ陸戦兵器！ 土埃と泥にまみれ、地べたを這いずり回るからこそ陸戦兵器！ それが空を飛ぶなど、美学に反する！」

と、一步も譲らない。

それでも空を飛ぶことを熱望するプレイヤーは後を絶たないが、運営が首を縦に振ることはなかった。

運営の方針上、『機甲騎兵で空を飛ぶ』のは適わぬ夢だが、空を飛ぶ術がまったく無い訳ではない。

少ないが手段はある。

それはMMORPG『パンツァー・リート』に酷似したこの世界においても同様だった。

魔動機械ならば飛行船。ペガサスやグリフォンなどの空を飛ぶ騎

乗動物。魔術による飛行などだ。

一番手軽なのは、空港におもむき旅客飛行船のチケットを購入することだろう。僅かな費用で空の旅が満喫できる。費用はかかるがレンタルすれば行き先は自由だ。

冒険者職業【ライダー】のレベルを上げ、騎乗動物を乗りこなすという手段もある。ドラゴンに跨り天空を駆る竜騎士などまさに浪漫だろう。

古式魔術には個人飛行を可能にする【飛行】の呪文がある。

一風変わった空の旅をご所望ならば、冒険者職業【魔女術】のスキル【魔女の箒】など如何だろうか。まさに字のごとく、箒にまたがって空を飛ぶ遊覧飛行はスリル満点だ。

もっとも、自身が魔女でなければ意味はないが。その魔女が約一名、箒にまたがり飛行していた。言わずもなぐリスである。

クリスは後方から追ってくる長い四本足のカニのような自動兵器の攻撃を巧みにかわし、飛行を続ける。

カニを髣髴とさせる自動兵器はクラブマンというひねりも何もない名で呼ばれていた。

ギルドではC級にランク付けされ、機甲騎兵があれば互角に戦える。荒野でも目にする機会の多い自動兵器だ。それでも2〜3体お持ち帰りできれば、出費を清算しても一月は充分生活できる。

「引き釣りに成功したのはいいんだけど、ちょーっとティエレから離れすぎちゃったか。引っ張っていくのにスリル満点だ」

傍らを通り過ぎていく銃弾に冷や汗が止まらない。守りの護符がなければ衝撃波で大怪我をしていたところだ。直撃すればその心配すら無用になる。

A M Fの範囲に入らないよう、かつ離れすぎないように注意しながら自動兵器を引っ張っていく。

やがて見えてくる切り立った岩山。

大地からぼつんぼつんと脈絡なく突き出ている高さ30メートルはある大きな岩だ。それが三つ連なり、ひとつの大きな山のように感じさせる。

クリスはその真ん中の大岩の中腹にティエレを隠していた。

騎兵を隠すのにちょうどいい窪みがあったからだ。奥の浅い洞窟と違っていいかもしれない。窪みの手前は直径4メートルほど平らになっていて足場に十分な広さがある。

高度を2メートルまで落とし、自動兵器のセンサーを地表にひきつけておく。そのまま最初の岩の裾を高速で回りこみ、クラブマンの視界から外れたところで一気に高度を上げた。真ん中の岩の窪みの高さまで飛び上がる。

足場に着くと箒をアイテムボックスにしまい、ティエレの操縦席に駆け込んだ。

手早くアークトライブを起動させる。

低い駆動音とともに、目を覚ましたアークトライブが周囲のマナを取り込み魔力に変換していく。伝導チューブを通し全身に力を伝達していった。

突如として発生した強力な魔力に、追いかけてきたクラブマンのセンサーが反応する。

A M F内においても中和しきれない強力な魔力は、機甲騎兵のアークトライブ特有のものだ。ただちに戦闘モードを対車両用に切り

替える。

背中の甲羅の一部が展開し、中から30mm機関砲が姿を現した。両腕の缺の内側に並ぶ鋸のような突起が高速で振動を始める。

不埒な侵入者に鉄槌を下すべく、猛スピードで岩を回り込むクラブマン。頭上の魔力の発生源に砲口を向け、センサーが敵の動きを逃すまいと探知精度を上昇させた。

ために、足元がおろそかになった。

岩の間に張り巡らされた極細のワイヤーに長い脚をとられ、バランスを崩すクラブマン。脚を伸ばして本体を持ち上げ、重心が上がっていたのも仇になった。

オートバランスが機体制御を行うが、脚に絡まるワイヤーに邪魔され思うよう機体の状態を制御できずにいた。踏ん張ろうとして踏ん張りきれず、上体を起こそうにも岩を回り込んだ勢いを殺しきれず。結果、もんどり打って地面へと激突した。赤茶けた砂埃が巻き上がり、周囲を赤く染める。

「ちゃんす！」

仕掛けた罠が図にあたりほくそ笑むクリス。

ティエレを発進させ、倒れた自動兵器目掛けて岩山の中腹から飛び降りた。並みの機甲騎兵の倍はある重量物が重力に引かれ、もがく自動兵器目掛けて落下する。

狙いは高速振動する力二の缺。

アレは厄介だ。いかに重装甲を誇るティエレとはいえまともに食らえば無事ではすまない。遠慮なく右の缺の上に着地し踏み潰した。重装甲騎兵の降下でさらなる砂埃が舞い上がる。

同時に左の缺をハルバートで叩き割り、銃口を向けてくる30mm機関砲は胸部のアサルトアンカーで破壊する。

対装甲兵装をすべて破壊されようともクラブマンは動きを止めな

い。だが、ティエレに押さえ込まれてはもはや抗う術はなかった。

「これで終了」

クラブマンの背中の中羅に左腕を差し出す。

側腕部に装着されたパイルバンカーの鋭い槍先が、陽光を受け鈍く輝いた。

轟音。

まさに轟音が岩肌を打った。びりびりと大気が振るえ振動で零れ落ちる岩くず。

主演算装置を甲羅ごしに撃ち貫かれたクラブマンが沈黙する。もはや動かぬ鉄くずと化した。

「これで二体目。ちょーっとペースが速いかな。ラストの三体目はもう少し間を置いたほうがいいか」

動かぬクラブマンを映像盤ごしに眺め、クリスは独り言ちた。

そもそもクリスが荒野で自動兵器狩りをしているには訳がある。

ラスカーシャの街に落ち着くこと一月あまり。クリスは仕事に精を出していた。

街中での仕事を。

機甲騎兵に乗るのが嫌になったわけではない。整備部には毎日顔を出し、ティエレの整備やワックスがけに余念のないクリスである。午前は整備部、午後からは冒険者ギルドから仕事を貰い街中での依頼をこなすという毎日を送っていた。お陰で街の住人達の評判は上々だ。

毎日仕事をしているとはいえ、午前中はティエレの手入れに整備

部に通っているため、騎兵持ちの主な仕事である自動兵器狩りに出かけることはなかった。

面白くないのはギルド上層部だ。

せつかくの騎兵持ち冒険者。街中の仕事でなく荒野に出て稼いでもらいたいのだ。

「街中の仕事は新人冒険者に任せ、あんたは荒野に出て稼いでこいや、コラ」という本音をオブラートで包み、差しさわりのない言葉で仕事を依頼し荒野へ送り出そうとした。

ちょうどティエレのオーバーホールも終わり、そろそろ荒野へ行くこうかと考えていた矢先のことだ。やたら低姿勢の癖に切羽詰った感の中間管理職っぽい職員に懇願され、少し気の毒に思ってしまった部分もある。

何はともあれクリスにも異存はなく、ギルドからの依頼を受けたのだった。

依頼内容はC級以上の自動兵器三体以上の捕獲。期間は二十日間。破壊でなく捕獲。これはわりと難易度の高い依頼だ。

ギルドでは定期的にこうした捕獲の仕事を登録している冒険者に依頼している。自動兵器に技術的变化がないか調べるためだ。

技術力が後退した現在、敵である自動兵器からであろうと人類は貪欲に技術を吸収しようとしていた。そのためなるべく原形を残した状態での捕獲が望ましい。

本来ならそれが可能な腕利きの騎手に依頼する重要な仕事であり、クリスのような新人の冒険者に回ってくる仕事ではない。

実はこれにはちょっとしたカラクリがある。

クリスのような荒野に出ようとしないうや、有望そうな流れの冒険者に「当ギルドは君に期待しているんだよ？ だから重要な仕事

を君に依頼するんだ」と含みを持たせ、やる気を出させるのだ。

人間、上から目をかけられていると知れば張り切るものだ。冒険者と言えど例外ではない。

仕事に失敗し自動兵器を確保できなくても、荒野をうろつく兵器の数を減らすことになる。支払う報酬も少なくなつて万々歳だ。その際、「今回はついてなかっただけさ。我々は君の実力を高く評価しているのだから」とフォローしておけば波風も立たない。

依頼をこなせる騎手を別に雇っておけば調査のための捕獲用も確保できる。ギルドにとって損なことは何もない。

ギルドの思惑などお見通しのクリスではあつたが、特に気を悪くすることなく依頼を受けた。オーバーホール後の仕事としては手ごろだし報酬も悪くなかつたからだ。

クリスがベースキャンプに帰還したのは昼前のことだ。

今回の仕事でギルドが派遣した部隊はコンテナを二つ牽引する大型トレーラーが五台。護衛用車両四台。派遣された人員に依頼を受けた冒険者を含めて総勢六十人の大所帯となっている。

部隊は荒野に近いレグン山脈の麓にベースキャンプを築いていた。捕獲することにラスカーシャに戻つてはあまりに時間のロスだ。道中の危険もある。

そのためギルドは安全な場所にベースキャンプを築き、この場では捕獲した自動兵器を解体・梱包するにとどめていた。本格的な調査はラスカーシャに帰ってからだ。

「よう、嬢ちゃん。戻ったかい」

「ただいま戻りました、グラスさん」

クリスを出迎えたのは整備班班長のグラスだ。

今回の仕事はギルドが依頼主のため、派遣部隊の整備主任として部隊に同行しているのだ。

グラスはティエレが牽引してきたクラブマンを眺め笑みをこぼした。集まってきた整備員に指示し、捕獲してきた自動兵器を所定の場所に運ばせる。簡易検査の後、獲物は解体・梱包される。

「十日で二体の自動兵器を仕留めてくるとは、なかなかいいペースじゃないか」

「たまたまですよ。運が良かっただけです」

「謙遜するねえ。まあいい。後は任せて嬢ちゃんは休んでな。それともすぐに出るかい？」

「さすがにやめておきます。今日はこのまま休みますよ」

依頼された内容は二十日間で三体の自動兵器捕獲だ。ノルマさえ果たせばいつ出撃するかは冒険者の自主的な判断に任されている。

通常、騎兵持ちの冒険者が自動兵器狩りに出る場合、月に三体が目安とされている。それ以上の成果を挙げる騎手もいるが、蓄積する疲労やコストパフォーマンスを考えるとそのくらいがちょうどいい。

ゲームとは違い、現実の世界ではそこにいけば獲物がいるとは限らない。獲物が通りかかるまで何日も待機することはざらだった。

移動や待機、機体整備に騎手の休養を含め、月三体が最も費用対効果に優れている。

それを考えると二十日で三体の捕獲というのは一見オーバーワークであるが、山脈を越えた場所にベースキャンプを築くことで移動

による時間的ロスが無くなることを考えると妥当といえなくもない。

「それがいい。明日は中日だ。今日明日ゆっくり休んで後半がんばんな。ああ、疲れているところ悪いんだが、嬢ちゃんの騎兵、整備車両んとこ移動させといてくれ。整備と補給しとくからよ」

「お手数かけます」

「いいってことよ。次に出るとき、万全の体制で出させるのが俺たちの仕事だからな」

手をひらひらさせて去っていくグラス。解体中のクラブマンの様子を見に行くのだろう。クリスマスも再びティエレに乗り込み整備車両へと向かう。

日中の荒野は気温が高く、照りつける太陽は確実に体力を奪っていく。自覚するほどの疲労は感じないが、グラスの進めどおり今日はゆっくり休もうとクリスマスは決めた。

間幕 とある地にて

石畳の薄暗い通路を急ぎ往く者がいる。

細かな意匠の施されたローブに身を包む魔術師と、鋼の鎧にピロイドのマントを羽織った騎士。いずれも位の高い地位につく者らしい。ふたりは横並びに歩んでいる。

男達は無言だった。

互いに視線を会わせることなく、一言の会話もなく。男たちの間には重苦しい雰囲気が続いている。

ふいに、騎士風の男が歩みを止めた。

先に出る形となったローブの男が、いぶかしげに振り返る。
鎧の男は考え込むようにじっと目を綴じていた。

「・・・いかがされた。フェルナンデス殿」

「本当にこれでよかったのであろうか・・・」

フェルナンデスと呼ばれた騎士は、喉の奥から搾り出すように独り言ちた。誰かに答えて欲しいのではなく、自らの胸の内に答えを探すかのように。

魔術師は自身の不安を打ち消すように答える。

「良いに決まっている。それともフェルナンデス殿は・・・姫様をお疑いか？」

「いや、それは・・・」

「この地を結界で覆い、きやつらめの侵入を阻むこと八十年。いかにの方々のお力添えがあるとはいえ、限界の日は近い。・・・賭けであることは間違いないだろう。しかも分の悪い賭けだ。しかし、我らにはもうこれしかないのだ」

魔術師は嘆息した。重い、とても重い息だ。

フェルナンデスから視線を外し、通路の先の豪華な扉を見て言った。

「往こうフェルナンデス殿。姫様の時間は、我らに残された時間はあまりにも少ない」

「・・・そうであったな。我らが取れる手段は限られている」

騎士は心の逡巡を振り払い歩き始める。

しかし、その足取りは重いものだった。

第08話 ギルドからの依頼（後書き）

誤字脱字ありましたらご連絡ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3833w/>

パンツァー・リート Panzer lied

2011年10月6日00時58分発行